

---

# 異世界に飛ばされたけど案外なんとかなるもんだ...

何かを探す人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界に飛ばされたけど案外なんとかなるもんだ…

### 【Nコード】

N2446BA

### 【作者名】

何かを探す人

### 【あらすじ】

主人公「黒羽蓮」は少女を助けてトラックに跳ね飛ばされたら森の中にいた。「いやおかしいだろ」これは主人公の「無視か？」異世界での旅をなぞったものである。「おい！」「うるさい！！」「…・すいません」

偉大なる先人達に憧れて勢いで書いてしまいました・・・この小説には、主人公強キャラ、（多分）ハーレムなどが含まれています。また処女作なので話の展開や文章の中におかしいところがあるかと

思います。そういった物が大丈夫な方はどうぞお読みください。

## 第一話 異世界へ（前書き）

この小説は処女作です。

日本語、及び創作が苦手な作者なので、  
大変読みづらい文章となっております。

また、物語の展開がおかしいところもあるとおもいます。  
それでもよろしいかたは下へスクロールしてください。

でははじめます

## 第一話 異世界へ

「・・・は？」

俺はどこにでもいる普通の高校生「黒羽蓮」だ。

高校から帰る途中、道路に転がって行ったボールを追いかけて道路に飛び出してしまった少女がいた。

その後ろからトラックが走ってきたのを見た俺は、

思わず少女に駆け寄り、少女を道路の脇に跳ね飛ばした。

かなり強く押したから痛いとは思うがそれは道路に飛び出した自分の責任だと思ってもらいたい。

んで、少女を助けた俺だったが、少女を助けることばかり考えてそのあと自分がどうやってトラックを

かわすのかを考えていなかった・・・

「焦ってたとはいえあの時の俺あほすぎるだろ・・・」

・・・ま、まあ少女が助けられたから後悔はしていないんだがな・・・

「で、その後トラックにはねられたんだよな。

んで、跳ね飛ばされて地面に体がついたと思ったら森の中で立ち尽くす・・・

どっかで聞いたことのあるような展開だなこれ」

俺はよく主人公がファンタジーな異世界へ飛ばされて冒険するっていう小説を読むが、

そのときに異世界に飛ばされる理由がトラックに轢かれたからってというのが多かった気がする・・・

「で、ここはどこだ？周りは木に囲まれてる・・・なんだこのメモ」

・・・

「・・・なんというテンプレ」

このメモによると、やっぱり俺は死んだらしい。

まあテンプレだが原因は神の書類ミスのようなのだ。

んで、死なせてしまったお詫びとして異世界に転生させたようだが、どうやら元の俺の体はグシャツとなってしまうって使えなかったらしい。

なので神が直々に俺の体を作りなおしてそこに俺の魂を入れて復活させたのが今の俺の状態らしい。

この紙には「その体ならばこの異世界で困ることはあんまりないでしょう」と書かれているんだが・・・

「正直こええぞ・・・いままで使ってきた体と違う体ってのは」

この体、神が作ったというだけあってかなりスペックが高い。

試しに走ってみると、30分近く走っても全く息切れせず（元々1時間くらい走っても大丈夫）、

ジャンプすれば5m以上跳ぶことができた（元の世界でもそれくらいは飛べた）

・・・あれ？あんまり変わってない？

「ま、まあそれでも少し変わってるから慣れていくとしてだ。魔法があるってのは予想外だったな・・・」

そうなのである。

この世界には魔法が存在して、戦いの道具として使われているらしい。

「・・・なんというファンタジー。っていうか俺も魔法使えるんだろうか」

このメモには魔法の基本的な説明と、いくつかの魔法の詠唱が書いてあった。

このメモによると、この世界の魔法は、自分の内に存在する魔力・  
・これをオドと呼ぶらしい。

をつかい、そのオドを詠唱によって練り上げ、それを魔法という形に変えていくというのが基本らしい。

また、魔力はオドだけではなく、大気の中にも存在しており、これをマナと呼ぶらしい。

上級者になると、自分の内からオドを発し、それをマナと混ぜ合わせて大規模な魔法を発動するそうだ。

魔法は属性と階級によって区別され、  
属性は、火、水、氷、地、風、雷の基本六属性と光と闇の上級属性、  
そしてその他の特殊属性。

階級は、下級、中級、上級、特級、超級、最上級の六階級に分別できらしい。

それ以外にも特殊な魔法として、精霊魔法や古代魔法など、  
普通の人では発動できない魔法も存在するらしい。

また、魔法はイメージさえできればどんなことも起こせるようで、  
オリジナルの魔法を作り出すこともできるらしい。

「ま、物は試しだ。やってみるか」

これから試す魔法は（ウォーター）という水属性下級魔法で、対象の頭の上から水を落とす魔法らしい。

「よし・・・」

来たれ水よ 敵に降り注げ ウォータ！」

詠唱を唱えると、自分の内からなにかが湧き上がってくるような感覚がした。

・・・多分これがオドだろう。そのオドが詠唱が進むにつれて自分から放出されて目標の上に集まり、水となって、魔法名を唱えると落ちた。

「んー・・・出て行った魔力が全て使われるってわけではないのか？」

出て行った魔力が全て集中したわけではなく、体から放出されたあと、そのまま大気中に拡散していった魔力も存在した。

「まあ練習すりゃそうだった魔力も制御できるようになるだろ。とりあえずいまは他の魔法の効果を見てみるかな」

俺はメモに書かれている全ての魔法を発動してみることにした。

・・・

「ふいーおわったー」

魔法というものに初めて触れたせいか、ついつい練習に没頭してしまった。



「ま、とりあえずこれでメモに書かれた魔法は全て発動できたか」

メモに書かれていたのは

(ウォータ)	水属性下級魔法
(スプラッシュブレード)	水属性中級魔法
(ファイア)	火属性下級魔法
(メルトストーン)	火属性中級魔法
(フリーズ)	氷属性下級魔法
(グレイブ)	地属性下級魔法
(ウインド)	風属性下級魔法
(ウインドヒール)	風属性中級魔法
(ボルトショック)	雷属性下級魔法
(プラズマソード)	雷属性下級魔法
(チェック)	無属性下級魔法

の11個だった。

一応全部発動することはできたが、制御が甘く、なかなか思った通り発動できなかった。

また魔法によって一度では成功せず、なんども唱えてやっと発動できたものもあった

しっかり発動したのはイメージしやすかったプラズマソードだけで、魔法を使うにはイメージが大切だということが理解できた。

「特にメルトストーンを発動した時はヤバかった・・・まさか溶岩が噴き出るとは」

あのときはやばかった・・・

地面がいきなり茹って溶岩が噴出し流れていったのにはビックリしたとっさにウォータの魔法を使って出てきた溶岩を全て固めたからよかったものを

あのまま流れっぱなしだったらここら辺一帯が原因不明の大火災になっただろう。

「まあそこら辺は要練習。とりあえず眠い・・・もう夜だし」

メルトストーンを使ったときの後始末で精神的にかなり疲れた・・・まあそのおかげで魔法の危険性と便利さをよく理解することができたが。

「とりあえず今日は寝て明日ここを出るか・・・」

溶岩を追いかけていったらちょうど街道もみつかったところだし」

まあ街道といっても草原にそこだけ草が生えていないってかんじの道だな

「枝を集めてつと・・・よし、これくらいでいいか。」

燃え上がるは 炎なり ファイアつと」

枝を集めてファイアの魔法で火をつけ、たきびを作った。

「あつちの常識が通用するかはわかんねーけど動物は火を怖がるもんだからな」

森の中にあつた果物（チェックで鑑定済み、リンゴみたいなもの）を夕飯代わりに食べて、

俺は明日に備えて寝ることにした。

「ふう・・・しかしあつちで生きてたときには野ざらしで寝るなんて考えられなかったな・・・」

幸い地面にはやわらかい草が生えており、寝ることはできそうだ。

「まあどうでもいいや・・・色々あって疲れた・・・おやすみ」

俺はすぐに寝付いた・・・

## 第一話 異世界へ（後書き）

黒「さて作者・・・」

はい・・・

黒「なんだこの見づらくてなおかつ無茶苦茶な文章は！」

いや、ほんとすいません。

他の人の小説をみて自分も書いてみたいなーとおもって書き始めたら  
まあこれがむずかしい

黒「んなこと自分の文章力のなさから考えればわかることだろうよ・  
・・・」

し、しかたないじゃないか！書きたかつたんだから・・・

黒「はあー・・・まあこれから頑張つて上手くする気はあるんだろ  
う？」

うん、こんな文章じゃ見てもらつ価値がないからね

黒「んじゃ頑張つてはやくうまくなつてくれよ？」

はい。

それではまだ主人公のキャラ設定もあやふやなこの小説ですが  
よろしくおねがいします。

黒「・・・えー」

1月7日 最初の部分を少し編集しました

## 第二話 戦い（前書き）

さて、二話目です。

あいも変わらない駄目文章ですがよろしくおねがいします。

ではじめます。

## 第二話 戦い

「あさかー・・・ねみい」

一夜たつて、起きた俺を迎えたのはそれは眩しい朝日だった。

「さて、一晩ぐっすり寝て体力も魔力もすっかりかいふくしたし、そろそろここを離れるとするか」

どうやら魔力は体力と同じく休憩すれば回復するようで、特に寝れば大きく回復するようだ。

「さーで、どっちに行くとするかなー」

昨日確認しておいた森からほど近いところにあった街道は、右に向かえば平原に続く道をなだらかにくだっていき、左に向かえば登り道で、その先には山があった。

「・・・ここは右だな。好き好んで山に行きたくはないし」

というわけで俺は右へ進んでいくことにした。

・・・

「しかし・・・きれいに平原しかないなこの道」

歩いて行く道の先に広がるのは雄大な草原。  
元の世界では考えられないほど広大だ。

「まあ街道があるってことはとりあえずここをあるいていけばいずれは町に着くんだろが・・・」

見渡す限りの草原。モンスターが出るかもしれない、という危険もついつい忘れそうになるほど  
障害物がなく、広い。

「・・・ん？」

のほほんとゆっくりあるいていた俺の耳に音が入ってきた。

「これは・・・人の声！？しかも悲鳴混じりだし！・・・ちっ！」

俺はその音が聞こえた方向に向かって走って行った。

・・・

「・・・なんだよ・・・これ」

たどり着いた場所で見えたものは・・・

賊と思わしき人が20人ほどで鎧を着けた人3人をいたぶっていた。

「くそ・・・どーなってんだこれ・・・俺はどうすればいいんだよ・・・」

賊に加わるのは問題外。

かといって騎士に加勢して賊を倒すのも無理が・・・

「くそっ・・・あつ、おい！大丈夫か！？」



賊たちと騎士たちが戦っている場所から少し離れた場所に騎士の仲間と思わしき人が倒れていた。

「おい、しっかりしろ！」

「・・・ぐ、うつっ！」

「目が覚めたか。待ってる、今すぐ治癒魔法を・・・

癒しの風よ 傷つきし者を包み込みて 争いの傷を消さん！  
ウインドヒール！」

「う・・・ぐっ」

「な、なんでだ！なんで効かねえ！？」

「ぐっ・・・無駄だ少年よ・・・私の傷はどうやら手遅れのようだ」

「そんなことねえ！もう一度・・・！」

「私の、くっ、ことはいい・・・それよりも少年よ・・・ぐっ  
ひとつ頼まれてくれんか・・・」

「ああ！なんだ？おれにできることならなんでもしてやる！」

「賊が私たちを襲ったのは、ぐうつ、私たちの身なりをみて、  
金になるものがあると見たからだろう・・・」

「頼む少年よ・・・財宝はどうでもいい・・・ただあのお方だけは、  
あのお方だけは賊の手に渡さないでくれ・・・」

「ああ！絶対に渡さねえ！そのあのお方っていうのはどこにいるんだ！」

「ありが・・・とう・・・あのお方は、馬車の中に・・・・・・・・・・」

「おい！？おい、おっさん！起きろおっさん！」

「頼んだぞ・・・少・・・年・・・よ・・・」

「おっさん！！！？・・・くそっ！！！」

俺は目の前で死にかけている人一人救えねえのかよ！

「・・・心配すんなよおっさん、ぜってえにそのお方っていうのは救ってやる」

「自分が死にかけてるっていう状態でその人のことを心配するほどおっさんにとって大切な人なんだろう」

「ならぜってえにその人は助ける！それがおっさんを救えなかったことへの罪滅ぼしだ！」

おっさんが死んだときに他の騎士も倒されてしまったらしい。  
賊たちは馬車についている美しい宝石や装飾品に夢中になっていた。

「・・・不思議だな・・・さっきと同じく、  
いやさっき以上に不利な状況なのに、全く怖くねえ・・・」

どうやら、俺は思ったよりもおっさんを目の前で死なせたことには  
らをたてているらしい。

「・・・覚悟しろよ賊たち。俺の覚悟は決まったぜ？

雷は敵を切り裂く剣とならん プラズマソード」

覚悟は決まった。武器もある。あとは戦うだけだ・・・

「・・・不動黒羽流 黒羽蓮！ 参る！」

・・・

「・・・ふっ」

賊に向かって駆けだした俺はまず近くにいた賊を斬る。

「な、なんだてめえ・・・ぎゃあっ！」

・・・1人

「はっ」

「ぐわあっ」

2人

「次！」

2人斬った後、その近くにいた6人の賊へ駆け寄る。

「な、なんだこいつ！おい！まだ一人いたぞ！」

賊たちに気づかれ全員が俺の方に寄ってくる。

「だが・・・遅いつ！」

「ぎゃあっ！」

「ぐわっ！」

一閃の内に3人の賊を叩き伏せ、返す刃で残りの3人を切り捨てる。

「お、お前よくもやったな！お前ら、かかれー！！！」

「「「うらー！！！」」」」

8人の仲間がやられたのを見て、賊の頭と思わしき人物が他の仲間に指示を出す。

その指示を聞いて残りの11人も賊が俺に向かってくる。

・・・だが、それは俺の狙い通り。

俺がこの戦いで負ける条件は誰かに動きを止められること。

だれかを犠牲にして他の仲間であつた俺を倒すなんていう作戦をとられたらやばかつたんだが・・・

どうやら杞憂に終わったらしい。

たとえ人数が多くても一方向から一斉にむかってくるならば・・・！

「不動黒羽流遠攻術亜流！ 斬空刃・雷！」

「「「「ぎゃあああああ！！！！」」」」

「・・・こうやってプラズマソードに魔力を大量に込めて放てば、巨大な雷の刃を放つことで11人くらいなら倒すことができる。」

「な、なにもんだてめえ・・・俺の仲間をこの一瞬で全員倒すだと・・・！？」

「・・・賊に名乗る名は無い」

「くっ、ちくしょおおおお！」

やけになったのか頭は剣を抜き、こちらへ走ってくる。

「終わりだ・・・不動黒羽流 絶牙」

「ぐはっ・・・ちき・・・しょう・・・」

バタッ

・・・プラズマソードで突き殺した頭が倒れる。

「ふう・・・終わったか・・・人・・・殺してしまったな・・・」

思ったよりも人を殺したことに對する罪悪感が少ない・・・  
神がなにかしたんだろうか・・・

「今はそれに感謝しておこう・・・だが、殺したことは忘れない。」

たといそれが賊であつてもだ・・・」

人を殺した事を忘れ人を殺すことに慣れてしまったらおわりだ。

「・・・そうだ、おっさんに頼まれた・・・」

賊を殺したことで忘れそうになっていたが、  
そもそもの目的はあのお方とやらをたすけることだったな・・・

「えっと、馬車の中だっけ・・・」

馬車に飛び乗り、幕を開けて中の様子を見る。

そこで俺が見たものは・・・

「・・・（ブルブル）」

・・・ブルブルと震える金色の髪が美しいかわいい少女だった。

## 第二話 戦い（後書き）

ぶふっ！「不動黒羽流 黒羽蓮！ 参る！」だってさー（笑）

黒「てめーが書いたんだろぅがよ！さくしゃあ！……！」

いやーしかしまさか剣術使いの主人公とは

黒「思ってたなかったんかい！」

うん、途中で演出どうしようと思って剣術入れればかつこよくねと思ったのが  
入れた理由

黒「しかも理由がかつこいいからって……」

まあいいじゃないか。

んじゃ主人公、剣術の説明よろ。

黒「俺がするのかよ……」

えっと、俺が使う不動黒羽流は、俺の家に代々伝わる剣術で、  
発祥は室町時代だそうです。

1体多を基本とした剣術で、  
イメージとしてはる剣の飛天御剣流がいいかと。

現代に入ってゲームやらアニメやらのこれは！と思った動きや  
技を加えている　　そうで、混沌とした剣術だそうです」

ほうほうなるほどねー

黒「・・・あんたが考えたんだろうが」

いやまあそうだけどね、ついでに今回出た技もよろしく

黒「あいよ、

まず一つ目の技（斬空刃・雷）は、

不動黒羽流 斬空刃を魔法型にアレンジしたもので、

自分の魔力を雷属性に変換して、剣にまわせて刃状に放つ技で、

通常の斬空刃と比べると、かなり殺傷力が高い技になっています  
また今回のこの技は、大量の魔力を込めたため大きくなっており、

20人くらいまでなら同時に倒せる大きさになっていました」

あれ？でも殺傷力なら風属性のほうが高かったよね。

こうスパッと斬れて

黒「まあそうなんだがな、今回は剣がプラズマソードだったから雷属性の

斬空刃にした。それに今の俺ではまだ普通の剣では斬空刃はうてないし」

ふむふむ・・・今回斬空刃を打てたのは剣がプラズマソードで

元から雷属性になっていて、

さらに自分の魔力でできた剣だから魔力が通しやすかったからうてたと。

黒「そういうこと。

で、もう片方の技、絶牙だけど、

あれは単純に走ってきた賊に向かって全力で突きをくらわせる



技  
」

・・・終わりだと言っておいて結構単純な技だねそれ

黒「だけど突くタイミングが早ければ外れるし、

遅ければ先に相手に斬られるから結構難しいんだぜ？

その分決まれば相手の勢いがそのまま威力になるから  
ほぼ確実にたおせるんだがな」

なるほど・・・単純ゆえに難しいと

黒「まあそういうこと。

解説は以上でいいか？」

OK・ありがとねー

では、説明ばかりで長くなりましたがこれで終わります。  
これからよろしく願います。

### 第三話 出会いと始まり（前書き）

この小説は思い立ったときに書いています。  
なので今日みたいに一気に登校する時であれば、  
登校しない日もあるとおもいます。  
そこを了承してお読みください。

では、第三話 出会いと始まり スタートです

### 第三話 出会いと始まり

「・・・（ブルブル）」

・・・さて、どうすればいいのだろう。

馬車の中には恐らくは恐怖に震えている少女がいた。

恐らくはこの少女がおっさんが言っていたあのお方だと思っただが・  
・

「あ、あのー？」

「つつつつつー！！（ガタツ）」

・・・これである。

さきほどからなんとか意志の疎通を図ろうと話しかけているのであるが、

怖がってしまつて話を通じない・・・

賊たちも全部倒したからこの少女が怖がる理由がイマイチ見えてこないんだが・・・

「・・・あ、あなたは・・・」

「ん？なんだ？」

「ひゃうー!？」

「・・・(汗)」

・・・あっちから話しかけてられてんのに返事したら怖がられるって；

・・・次話しかけられたら全部言い終わるまで返事しないことにするか

「・・・あ、あなたは・・・」

「あなたは私を殺すんですか？」

「・・・は？」

・・・さて、どう反応すればいいのだろう。  
まずなぜその結論に少女が至ったのかを少女の見方で考えよう。

・・・馬車で進む 突然賊に襲われる 馬車の中に籠る この馬車は外が見えないようになってる

喧騒がやむ 俺が中に入ってくる 俺がだれかはわからない  
普通に考えると賊の仲間・・・

・・・なるほど

「・・・君は俺が君たちを襲った賊の仲間だと思っているわけかい？」

「・・・(コクン)」

「あー・・・そういうことか」

確かにこの状況ならそう思ってもしかたないよな・・・

「あーっとな・・・俺は君の護衛の騎士たちに君たちを襲った賊から君を守るよう

頼まれて賊たちを倒して君を助けに来た。

で、賊は全て倒したんだけど・・・証拠のためにも見るかい？」

「・・・はい」

・・・

「・・・」

「・・・」

改めてみると悲惨な光景だな・・・

賊と騎士を合わせて24人が死んでしまった・・・

・・・この子だけでも守れたと思うべきか。

それとも俺の判断が遅くて守れた命を失わせてしまったと思うべきか・・・

「・・・君を守っていた騎士たちは最後まで君を賊から守ろうと戦っていたよ」

「・・・そうですか」

・・・こういったときに気のきいたことが言えないこの身が疎ましい。

「・・・私を助けて下ってありがとうございます」

「・・・礼はいらないよ。俺は騎士たちを守ることができませんでした」

「それでも！・・・私を助けてくださったことに変わりはありませんから」

「・・・そっか」

「・・・この子は強いな。」

普通なら人の死を見れば目を反らしたくなるものなのにじっと自分の騎士たちを見つめている。

「・・・それで、君はどうするんだい？」

「・・・ここから一番近い町に向かいたいと思います。もともとそこに向かう予定でしたし」

「・・・ならさ、俺を護衛に雇ってくれないか？」

「え？」

「実は俺さ、この地に来たばかりでこの辺の地理とか全くわかんねーんだ。」

だから君を守る代わりにこの辺のこととかを教えてほしい」

「教えるのはかまいませんが・・・そこは結構遠いですよ？」

「かまわない。どっちにしろ俺は街に行きたかったんだ。  
護衛くらいで道案内してくれるなら安いもんさ」

「ですが・・・」

「ん？」

「失礼ですがどのようなたたかうんですか？  
武器も持ってないようすし」

「あー・・・んとな、

雷は敵を切り裂く剣とならん プラズマソードっと、これでいいか？」

「え？あなた魔道士だったんですか？」

「魔道士・・・っつーのが魔法を使う人を指すのなら確かに俺は魔道士だな」

「そうなんですか・・・魔道士ならば充分な力ですね。  
では護衛よろしくお願いします」

「あいよ！」

こうして俺は助けた少女と一緒に行動することになった。

・・・

少女と一緒に歩き始めて数分のこと

「・・・気まずい・・・非常にきまずい・・・この少女と話すことがねえ！」

ひょっとしてこれからずっと無言？それはすごくまずい！・・・あ

「そっぴや俺達名前交換してねえな」

「あ、そうですね」

「しばらくの間一緒に行動するんだ。名前教えておくよ。  
俺の名前は黒羽蓮だ。よろしくな」

「クロハ・レンですか？」

「あー・・・蓮がファーストネームで黒羽がファミリーネームだから、

レン・クロハなのかな？」

「レン・・・ですか。ではレンさんと呼びますね」

「それでいいよ。で、君の名前は？」

「はい、私の名前はミリア、「ミリア・スペルテナ・テレジアス・フォン・フェレルシア」です」

「・・・なっがい名前。ていうかどっかのお姫様みたいな名前だな  
(笑)」

「？そうですね？」

「・・・はい？」



「・・・えっと、私の事知りませんか？」

「ああ」

「・・・えつとですね、私は「フェレルシア王国」の第三王女です」

「・・・なにぃー！！！！？」

「ひゃう！？」

「バカな！？ありえん！？」

「あり得ないとか言われても事実なんですが！？（泣）」

まずいまずいまずいって！？確かにいい身なりしてるけど異世界なら貴族くらいありえるだろうし

どつかの貴族のご令嬢かとは思ってたけどまさか王族とは思ってなかった！？

「まずいって・・・」

俺がこの世界に来て決めたことのひとつ「王族には関わらない」がこんなにも早くやぶれるとは！？

え？なんで王族と関わらないのかって？

王族に関わるとロクなことになりはしないってわかるからに決まってるーが！

俺は静かにくraisたいんだよ・・・（泣）「あ、あのー？」

「なんだよ!？」

「ひゃう!？」

「あ、悪い・・・不測の事態で混乱してつい怒鳴っちゃった。許してくれ」

「いや、それはいいんですが・・・  
なにか私悪いことしましたか？」

「いや、君に悪いことはないよ。君が王女だというのが問題なんだ」

「？私が王女だとどんな問題が？」

「あー・・・とな、俺はあんまし目立つのが得意じゃないんだ  
で、君が王女だと君を届けるときに目立つかもしれないだろ？  
それが嫌なんだ・・・」

「そうなんですか・・・」

「・・・嘘は言ってはいないぞ？」

届けた時に兵に囲まれたりするかもしれんからな

「えっと・・・じゃあ護衛についてもらうのはやめてもらいましょ  
うか？」

「・・・それも困るんだよな。ここで護衛から離れるとせつかくの街  
への案内がなくなってしまう。」

「んー・・・じゃ、こうしてくれ。俺はこのまま君の護衛を続ける。」

で、君が向かう街の入り口についたら君を兵に預けて別れる。それでおしまい。

それでいいかい？」

「・・・わかりました。それでいいですよ」

「よし、んじゃ進むか。っていうか俺敬語じゃないけど大丈夫か？不敬罪で捕まえたりとかしないよな？もしそうなら敬語にするが」

「つかまえませんかそのままの話し方でいいですよ！？」

「おーよかったよかった。いきなりつかまったらどうしようかと思つた・・・」

「・・・私そんな話し方ひとつで捕まえるような人に見えます？」

「いや、わからん。まだ出会ったばかりだしな」

「・・・そういえばそうですね、まだ出会って30分くらいしかたつてないんですね・・・」

「ふむ、俺が敬語じゃなくていいなら君も敬語じゃなくていいぞ？」

「いえ、私はこれが普通の話し方なので」

「へー・・・」

などとそんなことを話しつつ、俺とミリアの二人旅（旅なのか？）が始まつた。

### 第三話 出会いと始まり（後書き）

黒「やつと街に進み始めたのか・・・」

だねえ・・・実は主人公、復活したところからそんなに動いてなかったり

黒「作者の力不足だろうか」

グハッ！！ さくしゃに 500ポイントのダメージ

黒「なんだこのテロップ・・・」

？・・・大丈夫ですか？作者さん」

おお・・・ミリアは優しいなー・・・どこぞの主人公とは大違いだ  
（ぼそっ）

黒「死んどけ プラズマランサー一斉放射」

ぐばばばばば・・・その・・・魔法は・・・まだ本編に

黒「出てきていないがここは時間のながれないから大丈夫だ」

ミ「えっと・・・なんで作者は死んでるんですか？」

黒「気にするな」

ミ「えっと・・・」

黒「気にするな」

ミ「・・・はい（怖いよー！？なに言ったの作者さん！？）」

黒「さて、作者が死んでしまったので俺達で終わりたいと思う」

勝手に・・・殺す「プラズマランサー」うぎよぎよぎよぎよー！

黒「では駄文でしたが読んでいただいてありがとうございます」

ミ「これからもよろしくお願いします」

#### 第四話 異世界を知る（前書き）

しまった・・・日付が変わる前に投稿しようとしたのに間に合わなかった・・・

はい、四話目です。

これまでと同じく読みづらい文章ですが、それでもよろしいかたはお読みください。

それではどうぞ。

## 第四話 異世界を知る

さて、俺は周囲を警戒しつつミリアと会話をしながら歩いていた。するとミリアがこんなことを言い出した。

「しかし・・・フェレルシア王国の王女と言ったら結構有名なんですよけどねえ・・・」

本当に聞いたことがないんですよね？」

「ああ、マジで聞いたことはねえ」

「マジ？とはなんですか？」

「あー・・・俺が住んでいた所の言葉で、本当っていう意味だ」

「うーん・・・マジ・・・ですか・・・聞いたことがないんですよ・・・」

「まあ聞いたことがないのも無理ないとおもっぜ？」

俺が住んでるところは多分ミリアたちのところとははなれてるだろうし」

「そうなんですか？というかレンさんってどこの出身なんですか？」

「んー・・・それを説明する前にまずこの世界のこととこの近くの事を教えてほしい。」

なんせ転移事故に巻き込まれたと思ったら知らないところに一人ぼっちだったからな・・・

それに俺が住んでいたところではフェレルシア王国なんて国は存

在しなかったからね。

だからとりあえずこっちの常識を知りたいと思うんだが・・・」

さすがに一度死んだとか言っても信じてはくれないだろうしな・・・

「て、転移事故に巻き込まれてよく無事でしたね・・・」

「あー・・・まあ運が良かったんだろ」

くっ、こんな純粋な子を騙しているようで気が重い・・・！

・・・実際騙してるんだがな。

「そうだったんですか・・・そういうことなら私がこの世界の事を教えましょう！」

・・・胸を張って元気よくそんなことを言うミリア。

どうやらこの子は困っている人を助けるのが大好きなようだ。

「ああ、よろしく頼むよ」

「それではまずはこの世界の地理のことを教えますね」

「この世界は大きく分けて3つの大陸でできています。

まず1つ目は私たちがいるこの大陸「アイビス大陸」」

「このアイビス大陸は主にヒトが住んでいます」

「ん？主についてことはほかにも種族がいるのか？」

「はい、この世界には主にヒト、エルフ、ドワーフ、竜人、冥族、



獣人の6つの種族がすんでいます。

各種族の説明はあとでしたいのですがそれでいいですか？」

「ああ、頼むよ」

「続けますね。アイビス大陸は基本的にはヒトが住んでいますが、それ以外の種族も数多く住んでいます。

また、このアイビス大陸を4つにわけるように国が分かれていて、右下の「ルクセリア共和国」左上の「レジェンディウス皇国」左下の「アマルフィア帝国」

そして、私たちがいるここ、右上の「フェレルシア王国」「に分かれています。

4つの国にはそれぞれ色と旗印にしている特徴があり、簡単に説明すると、

ルクセリア共和国は緑色で共和を旗印にしており、レジェンディウス皇国は青色で旗印は信仰です。

アマルフィア帝国の色は赤で、旗印は争乱にしており、フェレルシア王国は黄色で団結を旗印にしています。

そして国ごとに司っている属性があり、国の色がこれを表します。緑のルクセリアは風を司っており、青のレジェンディウスは水と氷。

同じように、赤のアマルフィアは火を、黄のフェレルシア王国は地と雷を司っています。

一気に言いましたが大丈夫ですか？」

「ああ、問題ない、続けてくれ」

「はい、4つに分かれている国の力はほぼ同じで、この4つの国がそれぞれ均衡していることで

平和が保たれています。また、4つの国にはそれぞれ得意する分

野が存在し、

ルクセリアは農業を、レジェンディウスは学問を、  
アマルハリアは軍事を、フェレルシアは商業を得意としています。  
4つの国はそれぞれ足りない所を補い合っていますので、  
どの国もなくてはならないものになっています。  
この大陸については以上ですがよろしいでしょうか？」

「ああ」

「そういえばもうひとつありました。  
国の王族はその国が司っている属性の適性が必ずあります。  
そして、王の一族は必ず髪の毛の色がその国が表す色になります」

「ふーん、だからミリアの髪はきれいな金なのか・・・」

「あ、ありがとうございます・・・／／  
つ、続けますね・・・」

「あ、ちょいまち、適正ってなに？」

「えと、適正というのはですね、魔法をどれくらいの力で扱えるの  
かを表すものです。

これは段階でわかれていて、  
その属性の魔法は全く使えないFからE、D、C、B、A、Sと  
上がっていきます。最高はSです。

適性が高ければ高いほどその属性の魔法を使いこなすことができ、  
威力があがっていきます。

とはいえ普通の魔道士だとDくらいが普通で、熟練といわれる魔  
道士でもBくらい、

大魔道士と呼ばれるような人たちでもAがあればいいほうだとい

われます。

S 適性持ちの人はそのほとんどがなんらかの形で歴史に乗っているような魔道士ばかりで、

そういった人たちを「偉大なる魔道士」とよびます」

「なるほど・・・ミリアの適性はどうなってんの？」

「私はですね・・・雷がB、地がC、水がDで他はすべてFです」

「ふむ・・・それってすごいほうか？」

「私はあんまりそうは思いませんけど・・・かなりの方だということですよ？」

「へえ、すげえな・・・ん？てことはだ・・・俺いる意味無し？」

「いや！？そんなことないですよ！？それに私戦ったことありませんし！」

「レンさんがいないと私困りますよ！？」

「そ、そっか・・・そりゃよかった・・・」

め、迷惑とか思われていなくてよかった・・・

「まったく・・・本当にいないと困りますからね？いなくならないでくださいよ？」

「あ、ああ、わかった」

「それでは次の大陸の説明に入ります。次の大陸は「ゼクンディウ

ス大陸」です。

この国は冥族が他の種族を支配しています。

しかし、差別というものはほとんどなく、全ての種族が平等に扱われているそうです」

「・・・この大陸では差別があるのか？」

「基本的には平等な扱いなのですが、  
嘆かわしいことにヒトが他の種族を弾圧している所もあるそうです・・・」

「そうなのか・・・」

「続けますね。」

ゼクンディアス大陸とアイビス大陸の間では争いが起きていましたが、

現在はアイビス大陸の4つの国全てと友好条約が結ばれており、  
友好への道を歩んでいます。

この大陸には国は1つしか存在せず、その国が大陸のすべてを支配しています。

国の名前は「ラグレスティア国」といいます。

その他のこの国の情報は少ないのですが、

これは絶対に正しいと言えることは王族は闇の魔法を使い、  
髪の色は銀ということだけです」

「・・・その情報いるかい？」

「ま、まあいいじゃないですか。知って困るようなものでもないですし」

「まあいいけど・・・んで、最後の大陸は？」

「えーと、最後の大陸なんですが・・・」

「どうした？」

「この大陸について知っている人ってごく少数なんですよね・・・」

「なぜに？」

「理由としてはこの大陸との交流はないんですよ」

「行つた奴はいないのか？」

「いるにはいるんですが・・・」

その大陸に向かった者で帰ってきたという人はいないんですよ・  
・・・」

「・・・ホントに？」

「そう言われていますよ。あとは神がいるとかどうか・・・」

「神がいんのか!？」

「ひゃう!?!い、いきなり大声を出さないください!」

「わ、わりい・・・」

「全くもう・・・一応そういう風に言われているみたいですよ。  
確認したことがある人は誰もいないそうですが・・・」

「つまりいるかどうかはわからねえってことか？」

「はい」

「ふーん……」

神、ねえ……元の世界とは違う神だとすれば……  
その神はいきなりこの世界に現れた異物である俺をどう思っている  
んだろうな……

「聞いてますか？続けますよ？」

「ああわりい、続けてくれ」

「この大陸の名前は不明なのですが……  
名前がないと不便なので、私たちはこの大陸を神が住む地、アル  
カディアと呼んでいます」

「アルカディアねえ……」

理想郷、ってか。また大層な名前なこと……

「これでこの世界の主な地理に関しての説明はおしまいです。  
続いてこの世界で生きている人達の事を説明したいのですが……  
この世界には主に6つの種族が暮らしていることは説明しました  
よね？」

「ああ、ヒト、エルフ、ドワーフ、竜人、冥族、獣人の6つだろ？」

「はい、それで会ってます。

では次は1つ1つの種族を詳しく説明していきますね。  
まずは私たちヒトです。

特にこれといった能力はありませんが、手先が器用でものを作るのが得意な種族です。

私たちは何かの精霊に好かれやすいということは無いので、魔法を放つには自分の力で全てを行わないといけません」

「精霊つーのは？」

「この世界を維持しているといわれる存在で、世界のどこかで私たちを見守っているとされています」

「へえ・・・ウンディーネとかもいるのか？」

「よく知ってますね・・・ウンディーネというのは水の精霊の一種で、

ルクセリアにあるセーラン湖にいとされています」

「へー・・・」

やべえ、怪しまれたかもしれん。

「ウンディーネの事を知っているということは  
案外近いところにレンさんの故郷はあるのかもしれないね！」

「あ、ああ、そうかもな」

純真でなによりだ・・・

「続けますね、次はエルフです。

エルフは森の民とも呼ばれ、魔法を得意とし、魔力が多い種族です。

また、風の精霊に好かれやすいという特徴を持ち、風の魔法が得意な人が多いです。

その次はドワーフです。

ドワーフもエルフと同じく森の民ともよばれていますが、魔法は苦手で力が強い種族です。

また、土の精霊に好かれやすく、ドワーフが作った武器は土の加護を受け、

長持ちしやすいという特徴をもっています。

その次は竜人です。

竜人は竜が時の流れに合わせてすごしやすいように体を変えた種族と言われており、

山の中にすみ、魔力がない代わりに強い力を持ち、竜人特有の能力をもつといわれています。

竜人は様々な属性に分かれており、属性によって、火の竜人、水の竜人と分けるそうです。

そして冥族です。

冥族の発祥は不明なのですが、古代文献の多くには、気が付いたらそこにいた。と書かれています。

闇の精霊の加護を強く受けており、強力な闇の魔法を使いこなしますが、

それ以外の属性の精霊には嫌われており、闇以外の魔法を使うことはできません。

また、夜の民とよばれており、夜になるとより力が強くなるということです」

「冥族っていうのはアンデットなのか？」



「アンデットというのはそういう種族のモンスターで、冥族にアンデットと言うのは禁句で、

仮に言ってしまった場合その場で殺されてしまっても文句は言えないので

決していわないようにしてください」

「・・・聞いたいてよかったよ」

「ですね・・・」

そして最後は獣人です。

獣人はその名の通り、獣たちが人の形をとったもので、非常にたくさん種類にわかれています。

元になったものがあるかでそのあり方が大きく変わるのでまとめては言えません。

一番数が多いといわれる猫が元になった猫人は、魔法が使えない代わりにすばしっこくそうです。

以上で種族についての説明を終わります」

「ありがと。他に聞いておくべきことはあるかい？」

「そうですね・・・お金の価値ってわかります？」

「わかんねえ」

「そうですね。ではお金についても説明したいと思います。

この世界の通貨はニルで、銅貨、銀貨、金貨、白貨、黒貨の5つのお金があります。

銅貨が100で銀貨1つ、銀貨100で金貨1つ、金貨100で白貨1つ、白貨100で黒貨1つになります。

価値は・・・確か普通に暮らすなら1日銀貨10個くらいでよか

「たはずです」

「なるほどね・・・んじゃこの近くの事を教えてくれないか？」

「はい。いま私たちがいるのはフェレルシアの南の国境近くで、この街道をこのままいくと、

ルクセリアとの国境に位置する町につきます。<sup>ジェニス</sup>ジェニスは比較的大きな町で、

国境にあるだけあり人の流通が激しい街です。

レンさんもここにつけばこのことがもつとよくわかると思いますよ？」

「そうなのか・・・ミリアはなんでジェニスに向かったんだ？」

「一応第三王女とはいえ姫なので街の視察に向かっていたんですよ・・・まあ今回の事件で視察は無しでしょうけど・・・」

「あ・・・わりい・・・」

「いえ・・・」

「・・・」

やべえ・・・気まずい・・・

「あ、んじゃさ！この道を逆に進むとどこに着くんだ？」

「えつとですね、この道は途中いくつかの街の中をとおりますが、最終的には王都につきます。

8日前に王都を出てここまで馬車で来たのですが・・・」

「あ．．．」

「．．．．．」

き．．．気まずい．．．！

．．．

side ミリア

駄目です．．．あのことに近い話題が出ると気まずくなるとわかっていても

どうしてもあの事を思い出してしまいます．．．

突然近くの森から出てきた賊．．．

騎士たちに絶対に馬車から出るなと言われたこと．．．

騎士たちと賊の戦いの声．．．

戦いの音が止んだ時の希望．．．

知らない人が入ってきたときの恐怖と絶望．．．

外で騎士たちと賊の死骸を見たときの悲しみと虚無感．．．

全部まだ残ってます．．．

でも全部忘れなきゃ．．．

レンさんがいるから薄れているけど・・・

もしレンさんがいなくなったら・・・私・・・恐怖と悲しみに押し潰されそうです・・・

#### 第四話 異世界を知る（後書き）

えー・・・今回のあとがきは会話は無しです。

皆さん読んでくださってありがとうございます。

## 第五話 少女の涙

あのあとあの気まずさはすぐになくなり、

ミリアと俺は、楽しくおしゃべりしながら街道を歩き続けた。

とはいっても話の内容は国の成り立ちや魔法の呪文など  
異世界講座というにふさわしいものだったがな・・・

ふと気付くともう空は赤く染まり、太陽が沈み始めていた。

「なあミリア、そろそろ歩くのをやめて今日の寝床を確保しないか？」

この道をいけば街につくとわかった以上俺一人なら夜になっても歩き続けるところだが・・・

ミリアはそうはいかない。

小さな女の子の身で寝ずに夜を歩くのは厳しいだろう。

「そうですね・・・そろそろ暗くなってきましたし、どこか寝られそうなところを探して

そこで今日は寝ましょうか」

「よし、んじゃあもう少し先に森があるし、その近くで火を焚いてそこで休もうぜ」

「はい」

・・・

空が暗くなり、夜が深まってきたとき、ちょうどやすめそうな場所を見つけると、

俺はミリヤをそこに置いて枝集めと食糧集めのために森の中へ入って行こうとしたんだが・・・

「私もついていかせてください!」

「あー・・・」

・・・ミリヤがついて行きたいというのである

「いや、もう真っ暗だし森の中で動くのは危ないぜ?」

「それはレンさんも同じはずです!」

「つつてもなー・・・ミリヤ、自分の服装見てみ?」

「はい?」

俺の言葉に反応してミリヤは自分の服装を見まわした

「さすがにその格好で森の中で森の中に連れていくわけにはいかねえわ、大変なことになるぜ?」

「う・・・」

そう、今のミリヤの恰好は白いゴスロリ的な服・・・

そんな服で森の中に入ったら服が枝に引っかかってビリビリに破れること間違いなしだろう

服の替えがない今、服を傷つけるのはなるべく避けたい

「まあここで待ってる、ちょっとそこまでいって枝や果物を集めるだけだしすぐ戻ってくるって」

「でも・・・」

「んじゃ行ってくるわ！絶対ここで待ってるよー・・・」

「あ、ちよつと！レンさん!？」

俺はミリヤに動かないように言って枝集めに走った。

・・・

side ミリヤ

「あ、ちよつと！レンさん!？」

行ってしまった・・・

「どうしよう・・・」

本音を言えば追いかけてい・・・でも・・・

「追いかけて見つけれなかったらもつと怖いし仮に見つけたとしても

勝手に動いたから呆れられるかもしれないし・・・」



結局レンさんが早く帰ってくることを願いながら待つことにしました・・・

ザアアアアアッ

「つつつつ!？」

な、なんで風もないのに木が揺れたんでしょう・・・  
そういえば襲われた時も風もないのに賊たちが飛び出してきた森の木が揺れていましたね・・・

「・・・(ブルブル)」

・・・怖いです。一人になるとあの時のことを思い出します。

恐怖と悲しみが私をおおいます・・・

それに一人していると誰かに襲われるかもしれないという恐怖が・・・

「つーーーーー!!!!?」

怖い、怖いです。

思い出してしまった恐怖と悲しみ、  
それといつまた襲われるかという不安が私を襲います・・・

こうして一人になるとレンさんがいてくれたことの大切さがよくわかります。

もしあの後レンさんが私についてきてくれなかったらと思うとゾッとします・・・

「グスツ、怖いですよ・・・早く帰ってきてください、レンさん・・・」

ガサツ！

「っ！？」

森の木の枝が揺れました・・・  
もしかしたらレンさんが・・・！

ガサガサツ

「グスツ、はや、く、グスツ、泣きやま、ない、と・・・ヒクツ」

ガサガサガサツ

木の揺れの音はどんどん大きくなっています・・・  
段々こちらへと近づいているようです・・・

「あう・・・ヒクツ、なんで、涙、止まら、ない、の・・・」

レンさんに見られたら大きな心配をかけることになります・・・  
それだけは避けないと・・・

ガサガサガサガサツ

木の揺れが見える距離まで近づいてきました・・・

「うつつ・・・止まって、ヒクツ、よう・・・」

ガサガサガサガサッ！

とうとう物音の正体が森から出てきてしまいました・・・

「やらぁ・・・見ないで・・・よ・・・」

・・・森から出てきたのはレンさんではなく・・・

「あ・・・うぁあっ・・・」

大きな大きな・・・

「や・・・あっ・・・」

二本の足で立つモンスターでした・・・

「きゃぁぁぁぁぁあっ！！！！」

・・・

side  
レン

「んー・・・食べるようなもんは無かったかー・・・  
まあ燃えそうな枝は見つかったしいだろ」

この森はどうやら果物になる木は無いらしい。  
代わりと言っては何だが燃えそうな木が大量におちていた。

「まあとりあえず戻ろう。ミリヤを待たしてることだし・・・」

しかしなんでミリヤはあんなに俺についてきたがったんだ？

「まさか夜の森に興味がある・・・なんてないよな・・・」

もしそうだったら俺の中でのお姫様のイメージが大幅に書き変わる  
ことになるぞ・・・

「しかし・・・なんだこの奇妙な気配は・・・」

さつきから妙な音がする・・・それも森の至る所から。

「なんかの声みたいなんだが・・・小さすぎて聞こえん・・・幻  
聴か？」

それはない、と俺の中の何かが否定する

「少しずつ大きくなっているからもうすぐ聞き取れると思うんだが  
な・・・」

・・・

・ケ・・・テ・・・

「なんだ・・・何を言っている・・・？」

・ケ・・・ゲテ・・・

「もうちょい・・・もうちょい大きく・・・！」

・ケテ・アゲテ・・・

「もう一声・・・！」

タスケテアゲテ・・・

「つつ！？」

タスケテアゲテ・・・

「なんだ・・・この声は・・・助けてあげて・・・だど？」

タスケテアゲテ・・・

「何を・・・助けると・・・」

タスケテアゲテ・・・

「何を・・・」

タスケテアゲテ・・・

「つつつつ！？まさか！？」

俺はその考えを浮かべた瞬間、走りだした。

「くそっ！当たってほしくねえけど・・・！」

タスケテアゲテ・・・

「急げ・・・！この声かもしあいつのことを指すなら・・・！」

タスケテアゲテ・・・

「ミリヤが危なえっ！！！！」

・・・

side ミリヤ

「あう・・・うあ・・・あ・・・」

「グルルルル・・・」

・  
森から出てきたモンスターは私を見つめて唸り声をあげています・・・

「う・・・うう・・・」

怖い・・・怖いです・・・私はここで死ぬんでしょうか・・・

「嫌・・・死にたくない・・・」

せつかくレンさんに助けてもらったのに・・・  
まだレンさんに何も返せてないのに・・・

「グルルルルル・・・」

だけどモンスターはそんな私の思いとは関係なく唸り声をあげています。

「ま、魔法を・・・（来たれ雷の妖精たちよ　槍となりて敵を穿て）  
プラズマ・・・ランサー・・・！」

・・・

「な、んで、発動、しない、の・・・？」

「グルルルルル・・・」

「ひっ・・・いや・・・あ・・・死にたく、ないよ・・・」

誰か・・・誰か助けて・・・

「グルアアアアッ！！！！」

「助けてレンさん！！！！」



・・・

「・・・え？」

「生きてる・・・なんで・・・？」

確かモンスターが私に爪を振りかざして・・・

「悪いミリヤ、遅くなった」

「え・・・」

そこにいたのは・・・

「怖がらせちまったな・・・ごめん」

私のことを助けてくれた・・・

「もう大丈夫だ、お前のことはぜってえに守る」

背中を頼もしい不思議な少年でした・・・

「レン・・・さん・・・」

・・・

side レン

「レン・・・さん・・・」

「おうレンだ。今からこいつを倒すからそこで見ててくれよな！」

そうミリヤに軽口を叩いて

「覚悟しろよモンスター・・・イリヤを泣かせたのは俺のせいだが・・・」

俺は

「・・・まあやつあたりというやつだ、殺させてもらうぞ！」

キレた

・・・

「最初っから飛ばすぞ・・・不動黒羽流秘技亜流！轟波連斬刃・雷！」

ここに来るまでに作っておいたプラズマソードに魔力を叩きこみ、連続で雷の刃を飛ばす。

「ガアアアアアアッ！！！」

モンスターに当たった刃はモンスターを傷つけ、さらに電撃を走らせる。

「チツ・・・浅いな・・・」

確かに聞いてはいるものの特にモンスターの動きを抑えられるわけではないようだ

「なら・・・！」

俺はモンスターの懐へ一気に駆けこんだ

「ガアアアッ！」

モンスターが爪を俺に向かって振り下ろす

「ふっ・・・！」

チッ

ギリギリかわしきれなかったのか、爪は俺の頬を掠めた

「だが、懐には入った・・・決めさせてもらっぞ・・・  
ふっ・・・」

俺はモンスターの腹を蹴り上げる

「はっ」

持ち上がったモンスターの体を回し蹴りで上に蹴り飛ばす

「せやっ！」

飛んで行ったモンスターに向かって飛び、プラズマソードで斬る

「はあっ！」

さらに斬る

「せあっ！」

斬る

「ぜやっ！」

斬る

「でやっ！」

斬りまくる！

「せやあああっ！」

上に上がったモンスターをかかと落として下に落とす

「とどめだ・・・不動黒羽流奥義・・・竜牙滅殺刃！」

「ギィヤアアアアアア！」

最後にモンスターに向かって落ちながら剣で突き刺すとモンスターは断末魔を上げて死んだ・・・

・・・

「大丈夫か？」

モンスターの生死を確認した後、俺がミリヤに向かってそういうと、

「レン・・・さん・・・レンさん!!!!!!」

そっいつて泣きながらミリヤは俺に抱きついて来た・・・ってなん  
でさ!?

「わたっ、し、グスッ、すご、く、こわく、て」

「ひとり、っで、まってるっ、とき、に、グスッ、おそわ、れたと、  
きのこと、グスッ、思い出して」

「もんすっ、たあが、でて、グスッ、きたときには、もう、グスッ、  
しんじゃ、うと、思っ、て」

「それっ、で、すっ、ごくこわく、て、グスッ」

・・・そうか・・・俺が襲われた時の思い出につながることを言っ  
た時以外は

普通に話していて大丈夫だと思っていたけど・・・

「グスッ、ううっ、あうっ・・・」

本当は襲われたことへの恐怖は残っていたのか・・・

「っっーーーー!!・・・俺の馬鹿野郎」

そりゃそっだよな・・・襲われたことへの恐怖なんて簡単にはとれ  
やしない。

ましてや襲われたのは今日だ・・・

一緒に歩いている時に全然おびえている様子を見せなかったから

無意識の内にてつきり恐怖がとれたんだと思っちまった・・・

「・・・ごめん」

「グスツ、なん、で、レン、さんが、あやま、るん、です、か？」

「ミリヤがおびえているのに気付けなかったから」

「そん、な、それ、は、わた、しが、かくし、て、た、グスツ、からで・・・」

「でも怯えていたのは本当だろう？」

「・・・はい」

「だからごめんだ。俺は君の護衛なのに君を守ることができなかった」

「え・・・？」

「確かにモンスターからは守ったかもしれない。けど、依頼人の心が守れないようでは護衛失格だよ・・・」

「そんな！・・・一緒にいるときには私はしっかりできていました・・・」  
一人になったときに怖くなったのは私が弱かったから・・・」

「いや、そういう問題じゃないんだよ。

護衛なのにミリヤを一人にして怖がらせたしまった。これだけで俺が悪い理由になる」

「そんなこと・・・!」

「だからミリヤ、俺は君の次の命令を絶対に聞く。

死ね、と言われれば死ぬし、死んでも私を無事に街へ届けろ、と言え、この身がどうなるうとも、

君を絶対に無事に届ける」

「そんな、死ぬだなんて・・・」

「いや、これは俺なりの護衛失敗へのけじめのつけかたさ。失敗したことに對してけじめをつけんと俺の気が済まん!」

俺はこの異世界にきて浮かれてたらしい・・・  
こんな簡単なことを忘れるほど楽しむとは・・・  
現世の親に顔向けができねえ・・・

「さあ、なんでも言ってくれ!」

・・・

side ミリヤ

「さあ、なんでも言ってくれ!」

ど、どうしよう!? 私が泣いちゃったからレンさんにこんなことを言わせちゃった!

「えと、なにか言わないと駄目ですか?」

「ああ、なしは駄目だ」

どうしよう・・・こうなるとなにかを言わないとやめてくれないよ・

「あ・・・」

・・・い、いいよね、怖いのは本当だし。・・・うん

「えっと・・・じゃあ私を」

「私を？」

「だ・・・」

「だ？」

「抱きしめてくださいっ！」

い、言っちゃった・・・

「・・・はい？」

「は、早く抱きしめてください！それが私の命令です！」

「えっと・・・え、なんで抱きしめる？」

「いいから！早く抱きしめてくださいよ！」

は、恥ずかしいんですからあゝ・・・



「えっと、いいんだな？」

「早く！」

「・・・んじゃ失礼」

ギョッ

「あ・・・」

あったかい・・・

レンさんの温かさが私の奥底まで入り込んできます・・・

「う・・・うあっ・・・」

まずいです・・・また泣いちゃいます・・・

「・・・泣きたかったら泣け。その方が悲しみも晴れるだろうし」

・・・いいんですね

「うあ・・・あっ・・・」

「うわあああああんっ！！！！」

こうして私はレンさんに抱きしめながら・・・

思いっきり泣いてしまいました・・・

・・・

side  
レン

「寝ちまったか・・・」

泣き疲れてそのまま寝たみたいだな・・・

「ふわぁ・・・俺もねみいや・・・」

俺も横になつて寝るためにミリヤを離そうとするが・・・

「・・・離れねえ」

ミリヤの手が俺の服を掴んで離してくれねえ・・・

「・・・しょうがねえ、このまま寝るか」

そうしておれはミリヤに服を掴まれたまま、  
あぐらをかいて寝るのであった。

## 第五話 少女の涙（後書き）

いやーやっと思けたよ・・・あとはぐっすりねるだけだばっ！？

黒「このくそ作者あ！」

な、なんだよ黒羽・・・

黒「なんだ、じゃねえ！なんだあは！」

なにがだよー

黒「なんで俺の過去に何かがあるように書いたんだよ！」

あー・・・それね

黒「俺は現世では普通（？）の高校生だってハテナをいれるんじゃないー！！！」

まあ過去になにかがあるとおわせた理由はー

黒「なんだ・・・？」

過去に何かある人ってかっこいいじゃん！（キラーン）

黒「（ぶちっ）キラーンじゃ、ねええええええ！」

ドガン

俺はほしになるー！！！！（キランッ）

黒「はあ、はあ、くそ作者め・・・」

ミ「・・・どうしたの？」

黒「はあっ、いや、なんでもねえ」

ミ「？」

黒「んじゃ作者不在ですがここで終わりにしたいと思います」

ミ「駄文ですが見ていただいてありがとうございます」

黒「それではみなさん！」

黒ミ「この小説をよろしくおねがいします」

ぐふっ、俺が死んでも第二第三の俺が・・・！「メテオ」！！！！

ぎゃああああああああああ・・・



## 第EX話 夢（前書き）

外伝第一話です。

今回は主人公の夢の中となっています。

いつものように読みづらいですがそれでもよろしい方はお読みください。

でははじめます。

## 第EX話 夢

「おい！起きろ！」

「うわあっ！？」

俺は親父の声で跳び起きた・・・

「つてまでよ・・・？」

確か・・・俺は死んで異世界に行つたはずじゃ・・・

「ちよ、ちよいまち親父！殴るのはなしだ！」

「なに・・・？」

その声がした方に振り替えると・・・

「黙れ！いつもいつも寝ぼけやがって！今日は手加減しねえぞ！」

「ちよ、ま、ぎゃあああああ！！！！！」

・・・親父に殴られてベッドの上から吹き飛ばされる俺がいた。

「・・・なんでさ」

・・・

落ち着いた後に状況を整理してみると、どうやら俺は、

自分の過去を夢で見ているらしい。

「そついや死んだ時に色々後悔があつたな・・・そのせいか？こんな夢を見んのは」

・・・まああの時の後悔でここにこれたのならあの時の俺に感謝しとこう。

夢とはいえ現世に戻ってこれたんだ。

またあの世界に戻った時にためになることをしておこう。

「うーん・・・よし、あの異世界は戦うことが多いみたいだし、道場で剣の練習をすっか」

俺の家は不動黒羽流という剣術が代々伝わっている家で、俺はことあるごとに親父に教えを受けさせられていた。

「現世で生きてた時にはまだ全ての技を習得できてなかったからな・・・

あー・・・こんなことになるんならもっと練習の時間増やせばよかった・・・」

まあ後悔しても後の祭りだ、それに夢という形でだが現世に帰ってこれた。

「せっかくの機会だ。目覚めるまで剣の練習をするとすっか」

・・・

そのあと俺は一日中剣の鍛錬をした。

かなりの時間鍛錬したが、体の疲れが全く出ずにずっと鍛錬するこ



とができた。

夢ってすばらしい・・・

「ふう・・・しかしこの夢が親父が一日鍛錬する日の夢でよかったぜ。

まだ習えてなかった技も知ることができた」

親父が道場で剣の技を色々練習していたから、

そのなかで見たことのない動きがあった技を真似して自分のものにする事ができた。

「しっかしこの夢いつ終わるんだろうか・・・始まってから結構たつてるぞ？」

まさかこのまま誰にも気づかれることなく・・・想像したら怖くなつた。

「おい」

「つつつ！？」

「はい」

び、びつくりした・・・俺の方に声かけたもんだから俺が見えんのかと思つた・・・

「今日はお前にある方を護衛してもらつ」

「護衛任務ですか？」

「そうだ」

・・・もしかして

「お前に護衛してもらうのは如月蒼。如月グループのご令嬢だ」

やっぱり・・・あの日の夢か、これ・・・

・・・

実は俺の家は俗に言う裏の仕事というやつを受けている。  
俺はよく知らんがその道では結構有名な一家らしい・・・

ちなみに俺は現世では人を殺した事はなかった。

というのも俺が受けた任務は全て護衛任務で、  
襲われた時も速やかに護衛対象を安全なところへ連れていくのが俺  
の主な仕事だったからである。

もちろん逃げるときに追っ手と戦ったことはあるが、  
ほとんどの場合親父がどこからともなくやってきて追っ手を倒して  
しまうため、  
俺は人を殺すということを経験したことはなかった。

「まあ異世界で人は殺してしまったわけだが・・・」

したくてしたわけではないが、結果として俺は人を殺してしまった。  
それも何人も・・・

「・・・ははっ、気付いてなかったのはミリヤの事だけじゃなかった  
たってか・・・」

どうやら俺自身、人を殺したショックは大きかったようだ。  
今こうしてあの時の事を思い出すと、賊たちの死の瞬間が鮮明に蘇る。

「どうやらミリヤよ・・・助けられてたのは俺も同じみたいだぜ・・・」

あのあとミリヤについて行かず俺一人だったなら、  
俺は一人でいつまでもその事を考え続けてしまっただろう・・・

「・・・だが、俺の場合はこれを薄れさせるわけにはいかねえんだ・・・」

ミリヤはあの事を忘れていいが、俺は忘れてはだめだ。  
人を殺した。その事はけっして忘れてはだめだ・・・

「・・・黒羽の掟その八　人を殺したときはその事忘れるべからず」

黒羽流の掟にこんなものがある。

現世にいたときにはこの掟の意味がわからなかったが・・・今ならわかる。

「人を殺したことを忘れればやがてそれに慣れてしまう。」

人を殺すことに慣れてしまったものは人ではない。獣と同じだ・・・」

・・・まあ慣れたいものではないがな。

「人を殺すことに慣れるな・・・その事を改めて確認できたんだ。」

この夢を見てよかったよ」

・・・

自分の中で結論を出したあと、俺はある場所へ向かった。

「たしかここらへんだったよな・・・つとここだここ」

俺が向かったのは郊外にある公園だ。

「ここで蒼と出会ったんだっけ・・・  
懐かしいな・・・」

俺がこの任務で護衛した蒼と出会ったのがこの公園である。

「どこにいたんだっけ・・・」

確かあの時は・・・

「何してんだ？」

「え・・・？」

「如月蒼だよな？」

「うん・・・」

・・・そうだ。あのブランコに座っていた蒼に離しかけたのが最初だったな。

「俺はお前の護衛任務を受けた黒羽蓮だ。

お前の親からお前を探せと言われたので迎えに来た」

「・・・」

「一緒に来てもらえるか？」

「ぶふっ」

に、任務のときは感情を表に出すなって言われてたけどももう少し愛想良くしろよな俺w

「・・・嫌」

「・・・嫌と言われてもこっちも仕事なんだがな・・・」

「・・・」

最初の方はホントに無口だったっけ・・・

このときもどうやって連れて行こうか悩んでた記憶があるよ・・・

「あー・・・なんで帰るのはいやなんだ？」

「・・・つまんないから」

「子供かよ・・・」

「・・・」

「んー・・・どうしたら帰ってくれる？」

「・・・あなたが」

「ん、俺？」

「パーティーの間あなたが私と一緒にいてくれるなら帰る」

「え？それだけでいいのか？」

「・・・（コクン）」

「そんなことでいいならずっと一緒にいてやるが・・・」

「・・・ほんと？」

「ああ」

「・・・じゃあ帰る」

「わかった、んじゃ時間がやばいし俺がつれていくぞ？」

「・・・どうやって？」

「ちよい失礼」

「な・・・離して・・・！（バタバタ）」

「我慢してくれ、これが一番早いんだ。んじゃ行くぞ！」

「ひゃうー!？」

俺は蒼を抱きかかえて走って行ってしまった。  
所詮お姫様抱っこというやつで・・・

「あー・・・そっぴゃあの時かなり焦ってたっけ・・・」

会場に着いたとき蒼の眼が回ってまた焦ったなw

「ふう・・・あいつを見てよかった・・・」

この任務の後蒼と仲良くなり、よく一緒にいるようになった。

「あいつらとは色々やったがどれも楽しかったな・・・」

元々仲が良かった4人と蒼を加えた5人で色々やったっけ・・・

「・・・もうあいつらとも会えないのか」

そう思うと悲しいな・・・

「・・・だけど、俺はあの時にこの世界から死んだんだ」

「後悔したってそのことは変わらない」

「元の世界の事で悲しむのはこれが最初で最後だ」

そう言つと俺の体から光が発せられる。

「夢から醒めるのか・・・」

「・・・親父、お袋、圭一、亮、薫、玲菜、蒼」

「俺は違う世界で生きるけど・・・」

「この世界で生きていたとは絶対に忘れねえ」

光が激しくなってくる

「いままで一緒にいて楽しかった」

「だから皆、ありがとう！じゃあな！」

そうして俺は

夢から醒めた・・・

・・・

side 蒼

「・・・ありがとう！じゃあな！」

「っつーー!?!」



蓮君の・・・声？

「どうした？蒼」

「・・・うつん、なんでもない」

「・・・ありがとうね蓮君」

なぜかはわからないけど私はそんなことを口にしていた・・・

「私も楽しかったよ」

「ばいばい・・・」

私の頬には、蓮君が死んで枯れたと思っていた涙が流れていた・・・

## 第EX話 夢（後書き）

黒「・・・届いてたのか・・・最後の言葉・・・」

いやーよかったね

黒「ああ、これで現世に思い残すことはねえ」

そっか・・・ところで剣術すべて修めてなかったんだね

黒「ああ、大体の技は教わったんだがまだ一部の奥義はおしえてもらってなかったんだよな」

そうなのか・・・で、この夢でそういった技を身につけたと？

黒「全部ではないけどな」

ふーん・・・しかしもともと体のスペック高かったんだねえ。  
まさかお姫様抱っこで走れるとは・・・強化の必要なかったか？

黒「え？それくらい普通じゃないのか？」

・・・普通は無理だと思っただけだなあ・・・

黒「？」

まあいいや、で、この夢で殺した事と過去、両方とも区切りはついた？

黒「ああ、どっちももう終わったことだし割り切ることにしたよ。  
割り切るつつつても忘れはしないけどな」

そか、よし、んじゃ今日はここまで！

黒「・・・いきなりだな」

だってだらだらして長くなっただんだもの・・・

黒「まあそうだな、んじゃ終わるか

それでは読者のみなさん、読んでいただいてありがとうございます  
ます」

いつもの如くな駄文でしたが頑張りますのでよろしくお願いします。

黒「それではみなさん、また今度！」

1月10日 あとがきの一部を修正しました。矛盾していたので・・・

・  
奥義と言われるような技 一部の奥義

## 第六話 着いて分かれて（前書き）

はい、第六話です。

・・・言つことがありませんね。

まあ駄文ですがそれでもよろしい方はどうぞご覧ください。

それではどうぞ

## 第六話 着いて分かれて

「んあ、朝か・・・ねみい・・・」

眩しい朝日が俺の顔を照らし、俺はその眩しさで目が覚めた。

「・・・・・・・・」

しばらくぼーっとする。

「・・・・・・・・うし、目が覚めた」

少し待つとだんだんと頭がはたらくようになってくる。

「しかしなんで俺はミリヤにくっつかれてるんだっけ・・・」

昨日のことを思い出す。

「・・・・・・・・ああ、そうか、確か俺に抱きついて泣いてそのまま寝たんだっけ」

ミリヤをみる

「全く・・・なんの夢を見てるやら・・・」

そこにはにこやかに笑いながら寝ている少女の姿があった。

「・・・・・・・・起こすのも忍びないし待つとするか」

ということ、俺はミリヤが起きるまで待つことにした・・・

・・・

side ミリヤ

・・・あつかい・・・

何かあたたかくて気持ちいいものがあります。

「・・・そろそろ起きてくんねえかな」

あたたかい何かが私から離れようとしています・・・

「駄目です・・・」

「・・・離さねえし」

離れちゃ嫌です・・・

「おい、ミリヤ？」

あたたかい何かが私を揺らします・・・

「おきてくれませんかー？」

それが心地よくておちてしまいそうです・・・

「ミリヤ？」

・・・

「・・・起きろ！」

「はわわわわわわ！？」

ひゃああああ！？だ、誰ですか怒鳴ったのは！？

「何するん・・・です・・・か・・・」

起きた私の目の前にいたのは・・・

「起きたか寝ぼすけさん？（にこっ）」

温かさなど微塵も見えない怖い笑顔を浮かべたレンさんでした・・・

・・・

side レン

全く・・・さすがに2時間は寝すぎだろう・・・

「まったく・・・もう太陽はかなり高くなってるぞ？」

「あう・・・すみません、つい気持ちよくて・・・」

「ま、いいけどね」

「え・・・？」

「別に寝坊はいいんだけどね、それに今は君が主だし。ただもう起きて進まないとなまずいかなと思って起こさせてもらった」

「そ、そうですか・・・」

「それで、疲れはとれたかい？」

「え？」

「昨日あれだけ歩いてしかも最後にはモンスターに襲われたんだ、疲れが残っていても仕方ないと思ったんだが・・・」

「えと、私はほとんど疲れは残ってませんが・・・それを言うならレンさんはどうなんですか？」

「俺は大丈夫。全く疲れは残ってない」

「そうなんですか・・・」

基本俺は寝れば疲れがほとんど取れる。

昨日は結構しつかり寝れたから体の疲れは全て取れていた。

「んじゃ、そろそろ先に進むか。」

街・・・ジエニスだっけか、そこまでどれくらいかかると思う？」

「そうですね・・・昨日かなり進めましたしそこまで距離は無いと思いますよ？」



「そっか・・・」

「んじゃジェニスに向かって進むか」

「はい」

・・・

「あれがジェニスです」

あれから1時間ほど歩くと街が見えた。

「へえ・・・あれが・・・」

外からの様子は交易の街って感じた。  
街の外には市場が広がっている。

「ジェニスは国境にあるので様々なものの流通が激しいです・・・  
ってこれはいいましたっけ？」

「ああ、だが何度言ってくれてもいいよ。わかんないことばかりだし」

「そうですか・・・ところでレンさんはジェニスに着いた後どうするんですか？」

「とりあえず昨日説明してくれたギルドに行ってみようと思う」

「ギルドですか？」

「うん、とりあえずお金稼がないと生きてけないしね」

「そうですね・・・確かにレンさんほどの実力があれば充分ハンターとしてやっていけると思います」

「ありがとう」

異世界でテンプレとして存在するのがギルドだが、どうやらこの世界にもあるようだ。

ギルドはこの世界に無くてはならないもので、人々は困ったことがあるとき、ギルドに依頼を出すらしい。依頼を受けたギルドは、ギルドに登録した人、これをハンターと呼ぶらしい。

に依頼を受け渡し、ハンターがその依頼を解決するようだ。

依頼は多岐にわたり、日常のちょっとしたことからモンスターの討伐まで様々な任務があるそうだ。

ハンターの中には二つ名と呼ばれるものを持つ人もいて、

これは困難な任務、例えばドラゴンの討伐、に成功すると、その名誉を称えて名づけられるらしい。

また、非常に稀だがハンター以外でも二つ名を持つ者もあり、強大な力を持った者や、偉大なることを成し遂げたものに付けられるようだ。

二つ名が与えられることは非常に栄誉なことでされ、一種の特権階級でもあるらしい。

「さて、じゃあ街に入るか」

「・・・はい」

・・・その時のミリヤの顔はどこか寂しげだった。

・・・

「はー・・・ほんとに人が多いな・・・」

街に入った俺たちを迎えたのはたくさんの人だった。

「私も始めて来ましたけど人多いですね・・・」

俺たち2人はしばらく驚きで動けなかった。

「・・・さて、んじゃミリヤをどこにつれていけばいいんだ？」

「えっと、門の近くに詰め所があるって聞いたんですけど・・・  
あ、あそこですね」

「わかった」

俺はミリヤを連れてその建物に近づくと・・・

「・・・姫様！ー！！」

60、70くらいのおじいさんが俺たちの方に近づいてきた。

「じいー！！」

するとミリヤがそのおじいさんに返事をする。

「なに！ミリア様だと！？」

「おい、皆出てこい！」

「ミリヤ様が来られたぞー！」

それと同時に周りから兵士たちがぞろぞろと出てくる・・・やべえ、下がるう。

「姫様、ご無事でしたか・・・」

おじいさんがミリヤに安堵の表情を向ける。

「なぜじいがここにいます？」

「姫様の護衛の騎士たちからの定時連絡がある時を境に来なくなってますまい、

王都からジェニスへの道の周辺の街から搜索部隊を派遣したのですが、

その内の一部隊から姫様が乗っていたと思われる馬車と姫様の護衛の死体が発見したとの

連絡が入り・・・姫様の遺体を確認できず、搜索を続けると聞いていてもたってもいられず

私はジェニスに転移したのです。そしてこれから搜索に出ようかという時に姫様を発見したのです。

「ご無事なようですねによりでした・・・」

・・・搜索部隊が出てたのか、それならミリヤに教えてもらった探知魔法をつかえば合流できたかも知れなかったな・・・まあこうして無事でいるんだしよししよう。

・・・というか面倒なことになりそうな予感がするし逃げようかな  
「そうだったんですか・・・心配掛けてすいません、私が賊に襲われたときに

こちらのレンさんに助けられ、怪我一つなく此処にたどりつくことができました」

そうして俺を紹介するミリヤ。そんなこと言ったら・・・  
あーくそ、逃げねえじゃねえか・・・

周りの兵士達が一斉に俺の方へ向き直り俺に頭を下げた。  
そして兵士たちの中からおじいさんが出てくる。

「この度は、我らの姫君をお救いくださり、真に感謝いたします。  
お救いいただいた報酬は相応の物を支払いたいのだが  
今我らは残念ながらお支払いできるようなものを持っておりませぬ。

なのでこれから姫様を王都に送り届けるのですが、それに着いてきてもらい、

王都で報酬を渡そうと思うのですが・・・」

・・・ここは、

「申し訳ありませんがその話は辞退したいと思います」

断るとしよう、ここで受けるとさらに面倒なことになりそうだ。

「で、ですが報酬を払わないとこちらの面目がたちません！」

「かまいません、すでにミリヤ姫より報酬はいただいておりますの

で」

「は・・・？」

「ですよ、ミリヤ姫？」

「報酬って・・・まさかあの話のことですか！？そんなもの私を守ってくださったことに

釣り合うわけがないじゃないですか！」

「しかし、あの時の契約ではそのような話になっていたはず。契約外の報酬を受け取ることはできません」

「ですが・・・！」

「それに、あの話は私にとってお金よりも価値があったのですよ」

「・・・え？」

そう、今の俺にとってあの情報はなによりも価値があった。あの話が聞けただけでも充分に護衛した報酬になる。

「まあそういうわけなので報酬はいりません。

あと一つ聞きたいのですがよろしいのでしょうか？」

そうおじいさんに言う

「はい、なんですか？」

「この街のギルドはどこにあるのかを教えてくださいたいのですが・・・」

」・

「はあ・・・この大道りをずっと行くと広場があり、その広場に入って右側に進むとありますが・・・」

「そうですか、ありがとうございます」

俺はおじいさんにそういうと、踵を返して教えてもらった方向へ歩き出す。

「レンさん！」

ミリヤに呼び止められる・・・

「また会えますよね・・・」

振り返って見つめたミリヤの顔は不安そうだった・・・

「ああ」

「・・・約束してくれますか？」

「それは難しいかな・・・」

「いやだ」

「・・・そこはわかったって言うもんじゃないんですか？」

「俺にそんな常識はあてはまらんよ」

「・・・」

「はあ・・・」

少女に悲しい顔をさせるのは俺の趣味じゃないんだがな・・・

「・・・心配すんなって、縁がありやまた会える」

「・・・本当ですか？」

「まあ神のみぞ知るってやつだがな」

「そうですか・・・」

それきり互いに黙ってしまった。

「・・・じゃあ」

「ん？」

「じゃあ私がレンさんに会いに行きます」

「・・・へ？」

「もし暇な時がきたらレンさんを探しに行きますね」

そう、笑顔でミリヤは言った

「・・・ははっ、んじゃ見つからないように隠れないとな」



「隠れても無駄ですよ？絶対に見つけますから」

なにが楽しいのか知らんがにこにこ笑っている。

「そっか・・・んじゃまあせいぜい見つからないように隠れてますよ」

「はい、絶対に見つけますから覚悟してくださいね？」

「ん、んじゃまた会う時まで」

「はい、お元気で」

そうして俺は再び歩き出す。

「（はあ・・・面倒事がひとつ増えたな・・・）」

そんなことを思いながら、

俺は笑顔を浮かべて大通りを進んでいった。

・・・

side ミリヤ

「（なんでしょうか・・・この思い・・・）」

多分抱きしめられた時に生まれたこの思い・・・

まだこれがなんなのかはわかりませんけど・・・

「それでは姫様、参りましょうか」

「はい」

この思いの正体を知るためにも・・・

「（絶対に見つけますから覚悟してくださいね？レンさん）」

## 第六話 着いて分かれて（後書き）

うーん・・・

黒「どうした？」

いまいちお前の行動に一貫性がないような気がするんだよね・・・

黒「それはお前が大まかなプロットを立ててないからだろうが・・・

」

ぐう・・・ぐうの音も出ない・・・

黒「出てるぞぐうの音」

うーん、まあおいおい考えていこう・・・

ミ「というか私の出番ここまでなんですか!？」

おお、ミリヤ、こんにちは

ミ「あ、はい、こんにちは・・・じゃなくて!」

んー・・・実はまだそこらへんも確りとは決まってるんだよねえ・・・

ミ「そうなんですか？」

うん、基本この小説のコンセプトは「思い立ったら書いてみよう」

だから

実は先のことはあんまし考えてないんだよねえ・・・

黒「ってことはなにか？思い立たなかったら書かないのか？」

たぶんね、逆に思い立てば昨日今日みたいに一気に書くかもだけど。

ミ「つまり不定期更新なんですね？」

・・・まあそういうことだな

黒「はじめっから不定期宣言って・・・馬鹿じゃね？」

く、くそーっ！

ミ「あ・・・逃げましたね」

黒「逃げたな・・・さて、あとがきもここまで終わりのあいさつとします」

ミ「こんな駄文を読んでいただきありがとうございます」

黒「馬鹿な作者ですが

一応更新する気はあるみたいのでどうか見てやってください」

ミ「それではみなさん！」

黒ミ「また今度！」

## 第七話 ギルド（前書き）

あー・・・えらい・・・

一気に書くと疲れますね。

だんだん腕が痛くなってきました。

それでは第七話 ギルドです

どうぞお楽しみください！

## 第七話 ギルド

さて、ミリヤと別れた俺はギルドへ向かって街のメインストリートと言つべき道を歩いていた。

「ギルドがあるのは広場の右つて言つてたよな・・・」

先ほど道沿いにあつた地図によると、この街は正方形に近い四角形をしていて、

ギルドがある広場は街の中央にあるらしい。

また、地図を見たことでわかつたことがひとつあつた。

「この世界の言葉は英語とほぼおんなじなみたいだな」

地図を見たときに字を見ると日本語と違つていて焦つたが、よく見てみると文字はアルファベットとほぼ同じ形で、英語と同じように読むと

意味がわかるようになっていた。

「ラッキー・・・仕事で外国人相手もあつたから英語は結構いけるんだよな・・・」

・・・というわけで俺は文字が読めるということがわかつた。  
・・・

「ギルドってどこか？」

通りを抜けて広場に出た後、右に進んだところに大きな建物があった。

よくゲームとかでみる酒場のような感じの建物で、屋根のところに「ギルド」と書かれていた。

「ふむ・・・まあ入ってみるか」

俺はその建物の中に入って行っただ。

「へえ・・・こんな風になっているのか・・・」

建物の中には3つほどのカウンターがあり、そこでハンターと思わしき人が受付の人から依頼を受けていた。

「ふむ・・・登録ってどうすんだろ・・・まあ聞いてみるか」

俺はあいているカウンターに近寄り、受付の人に話しかけた。

「すみません」

「はい、ギルド協会ジェニス支部です。ご用件はなんでしょうか？」

「ハンターの登録をしたいんですが・・・」

「はい、ハンター登録ですね？ギルドについての説明があるのですがよろしいでしょうか？」

「はい」

「では説明いたしますね。」

まず、私たちハンターのことを説明します。

ハンターが受ける任務のことをクエストといいます。

ハンターが受けられるクエストは、そのハンターのランクによってきまっています。

ハンターのランク、ハンターランクと言いますが、

これは一番下のGから、F、E、D、C、B、A、S、最高のX、という風に上がっていきます。

このランクはハンターのおおまかな強さを表わしていて、高ければ高いほど強力なハンターといえます。

そして、クエストごとにランクが定まっており、ハンターが受けられるクエストは、自分のハンター ランクの2段階上までとなっています。

ただし、Aランク以上の任務は、

そのランク以上のハンターランクを持つハンターしか受諾することとはできません。

これは、Aランク以上のクエストは、Bクラスまでのクエストよりも格段に難度が上がり、

危険性が増すからです」

「ハンターランクを上げるにはどうすればいいんですか？」

「自分のハンターランク以上のクエストを、決められた回数こなすことで上がります。」

また、特殊な例としては、強力なモンスターを倒したときに上がる、ということもあります」

「なるほど・・・」

「ハンターはランクによってギルド協会からの待遇が変わり、ランクが高ければ高いほど良い待遇になります。」



例としては、ランクが上がれば上がるほど、ギルド内の宿が安く使用することができます」

「なるほど・・・二つ名というのは？」

「二つ名については、ハンターランクがSになったハンターに付けられます」

「クエストはどんなものがあるんですか？」

「クエストには様々な種類がありますが、主にモンスターを退治する討伐クエスト、

何かを取ってきてもらう採取クエスト、モンスターなどから依頼人を守る護衛クエスト、  
雑務などをこなす雑務クエスト、そしてそれ以外の特殊クエストがあります」

「受けたクエストの種類によって評価が変わるということとは？」

「基本的には無いです。」

「ギルドからの評価は全てランクなので」

「ふーん・・・」

なるほど、当たり前だが働けば働くほど評価が良くなるのか。

「続けますね。」

次はクエストについて説明します。

クエストは主に市民がギルドに依頼をすることで発生します。  
発生したクエストはギルドの判断によってランク付けされ、

そのランクのハンターがギルドに来た時に、優先的に回されます。ハンターはクエストを受けると、

そのクエストを絶対に達成しなければいけないという義務が発生します。

クエストの報酬は依頼人の前払いでギルドが預かっており、

ギルドからクエストの達成に成功したハンターに渡されます。

どうしてもクエストを達成できないハンターは、そのクエストを他の人に回すことでそのクエストを

やらなくてもよくなります。ただしペナルティが存在し、クエストが達成できなかったハンターは、

そのクエストの報酬分のニルをギルドに支払わなければなりません」

失敗したら逆にお金を払わなきゃならんのか・・・

「あと、ギルドは採取品の回収も行っています。

モンスターの牙や爪など、そういったものをニルに換金します。

討伐クエストの中にはそういったモンスターの部位を持ってこないとい

達成したことにならないクエストもございますので注意してください

また、魔結晶の回収も行っています」

「魔結晶？」

「魔結晶とは、モンスターが体内で作り出す魔力で出来た結晶で、魔力を発しています。

街の街灯など魔力で動いているものの燃料となるのがこれです。

これも持つてきてくださればその大きさと数によってお金に代えさせていただきます」

「ふむ・・・」

RPGでいうモンスターを倒したときのギルの代わりか・・・

「ギルドについては以上です。何か他に質問は？」

「いや、特にないです」

「そうですね、ではこれからハンター登録に入りたいと思います。  
まずはこの紙にサインしてください」

「はい」

ふむふむ・・・誓約文とな・・・

1、負傷や死については自己責任です

・・・いや確かに大事かもしれませんが、最初に持ってくるか？普通・・・

以上の事を了承し、ハンター登録をします。

「え、こんだけ！？」

「どうされました？」

「ああいや、なんでもないです」

まさかこれだけとは・・・

「はい、書けました」

「・・・レン・クロハ様ですね、ではこちらにどうぞ」

そう言われて俺は、カウンターの前に連れられていった。

・・・

「こちらの部屋に入ってください」

案内された部屋の中には水晶があつた・・・水晶？

「これからクロハ様の適性と能力をはかります」

「適性については知っていますが能力とは？」

「能力とはその人の力をランク付けしたもので、筋力、魔力、耐久、精神、敏捷、幸運の6つをはかります。

ランクは下から、F、E、D、C、B、A、Sと上がっていきます。最高はSです。

また、ランクの中にも上下があり、そのランクの平均より高ければ+が、低ければ-がつきます。

ただしこのランクはあくまでも目安としての判断基準なので、過信はしないでください」

「はい」

そりゃランクひとつで人の価値が決まればたまったもんじゃないよな・・・

「以上で説明を終わりますが何か質問は？」

「いえ」

「ではこの水晶に手を触れてください。そちらの壁に水晶から光が照らされ、結果がでます」

「はい」

そうして俺は水晶に手を触れる。

「しばらく待っててください。結果が出るまで少し時間がかかります」

・・・

手を触れてから5分くらいたった後、水晶から光が壁に向かって伸びた。

「結果が出たようですね・・・これはすごい」

受付のお姉さんが手のひらを口元にもっていき驚いている。

「そんなにすごいんですか？」

「ええ、まず能力からですが、筋力がB？、魔力がA、耐久がC？、精神がA？、敏捷がA、幸運がD？。

・・・幸運以外は世界でも有数のランクですね」

「そこまでですか？」

「ええ、例として挙げますと、この世界の一般的なヒトの男性の能力が、

筋力E、魔力E？、耐久E、精神F？、敏捷E？、幸運E？です。  
・・・あらためて比べるとすごいですねあなたの能力」

「マジか・・・」

たしかにあんなモンスターを倒せたんだから結構高いだろうと思っただけど・・・  
まさかそこまでとは。

「で、適性の方は・・・火B、水S、氷C、地C、雷S、風A・・・  
なんですかこの適性」

「たかつ！？」

「S二つつて・・・とんでもないですねあなた・・・しかも光と闇もAありますし・・・」

うええ・・・確かに魔法は使いてえけどこんな高い適性はいらねえよ・・・

ぜってえ目立つじゃねえか・・・

「しかもどうやらギフトがあるみたいですね・・・」

「ギフト？」

「ときどき持つている人がいるんですが・・・

ギフトとは生まれ持った才能という意味で、これを持つている人は能力に補正がついたり

ある属性の魔法を使うのが得意になったりと様々な効果がつくんですよ。

あなたのギフトは・・・「神の加護」？」

・・・もしかしてそれってこの体が神に作られたから・・・ってことじゃないよな。

「効果は全能力1ランクアップと、全ての属性の適性が3ランクアップする、というものみたいです」

・・・え？んじやなに、俺の適性が高いのは神が体を作ったからってことか？

・・・今度会ったらぜってえ殺す

「ふおおおおお」と老人の笑い声が聞こえた気がした・・・

「しかしやばいな・・・これをお偉いさんに知られるわけにはいかねえぞ・・・」

確かミリヤはSランクの適性を持った魔道士は歴史に乗っている人ばかりだと言った・・・

そのSランクを俺は2つも持つちまってる。

もしこれが偉い人に知られたらまず間違いなく利用しようとするだろうな・・・

「冗談じゃねえぞ・・・利用なんてされてたまるか・・・！」

・・・もともと俺は目立ちたい性格ではないけどこれじゃあ目立ちたくても目立てんな。

「しかしこれじゃあへたに動けんな・・・よく考えて動かんとな・・・」

そう俺がこれからのことについて考えていると・・・

「あ、あのー、聞いてます?」

「あ・・・」

お姉さんのこと忘れてた・・・

・・・

その後俺は部屋から出てカウンターの前で待つように言われた。

「まあとりあえずは普通にしてて大丈夫だろ、近くに偉い人が来ない限り普通にしてよう」

ビクビクしてると帰って怪しまれそうだしな

「お待たせしました、これがギルドカードです」

そういつてお姉さんは俺に金属でできたカードを渡した。

「そのギルドカードはあなたがハンターであると証明するものです。ギルドの施設を利用するにはかならずそのギルドカードが必要に



なりますので

必ずなくさないようにしてください。もしなくしてしまった場合は再発行しますが、

再発行には銀貨10枚が必要です」

「わかりました」

「ギルドカードには所有者の名前とハンターランク、二つ名が存在する場合は二つ名が記入されます。」

全て間違いないですか？」

確認すると、    レン・クロハ    H R    G    と書かれている。

「間違いないです」

「ではこれでハンター登録は終了です。すぐにクエストを受けられますがどうしますか？」

「・・・どんなクエストがあるか見せてください」

「はい、こちらが一覧となっています」

そういつて手渡された神にはいくつかのクエストがのっていた。

ゴブリン討伐クエストや花見草採取クエストなどがある。

「このゴブリン討伐というのは？」

「これはですね、最近ゴブリンがこの近くで大量発生しています、その数を減らしてもらうために

ギルドから出されたクエストです。

ゴブリンは小さなモンスターで、一匹一匹は弱いのですが、群れをなしていることが多いので油断すると囲まれてしまいます」

ふむ……ゴブリン5体の討伐、証拠としてゴブリンの右耳5つの回収ね……

「んじゃこれを受けるよ」

「はい、受諾しました」

「そのゴブリンはどこによくいるんだ？」

「ゴブリンは街の外に出ればどこにでもいますが……一番目撃情報が多いのはこの街の南東側でしょうか」

「ん、ありがとう。んじゃ行ってくる」

「お気をつけて」

俺はお姉さんに一礼すると、ギルドの外に出て街の南出口を目指して歩き始めた。

## 第七話 ギルド（後書き）

ははははは、どうだ黒君、私の強化っぷりは！

黒「有難迷惑じゃボケがーっ！！！」

ぐぼはあっ！！！！

し、仕方ないじゃないか・・・だって、強くしたかったんだから

黒「いくらなんでも限度があるだろうが！」

つつてもなー・・・体の方はそんなに手を加えてないんだぞ？

全能力１段階アップしただけだし・・・

黒「・・・まあたしかにそうかもしれんが、適性の方はどう説明する？」

いやー魔法使わせてみたいじゃん？

黒「・・・終焉は刹那・・・」

ちよお！？それは無しだ！冗談抜きで死ねる！

黒「ちっ・・・」

ふいーあぶねえ・・・

黒「つか結局現世の神〃作者なのか？」

いやだろうっね？

黒「わかんねえのかよ・・・」

そこらへんも構想中、まあとりあえず今日はここまでだ

黒「わかった」

それではみなさん！

相変わらずの駄文ですが読んでいただきありがとうございます！

黒「頑張つて書いて行くのでどうぞよろしくお願いします」

それでは！

黒「また今度！」

## 第八話 はじめてのクエスト（前書き）

第八話 はじめてのクエストです

この話は最初は次の話と一つだったんですが、あまりにも長くなつてしまったので

途中で切ることにしました。

そのため今回の話にはあとがきがありません。  
そこをご了承のうえ読み進めてください。

それではどうぞ

## 第八話 はじめてのクエスト

南門から外に出た俺は、ゴブリンを探して南東方向へ進み始めた。

「しっかしゴブリンかー、

ファンタジーのモンスターの代名詞って感じのモンスターだけど  
どんなんだろなー」

そんなことを言いつつ街の外を散策する。

街の南側は山に囲まれていて、このまま山を登ると違う国に出てしまつらしい。

「なんて言う国だっけ……ル……ル……  
ルクセンブルク？……それはヨーロッパの国だろ俺……」

自分に突っ込みながらあたりを見回していると、

「おっと、出たか？」

少し先にモンスターたちの群れがあった。

「んー……長い耳に醜悪な外見をした小さな二本足で立つモンスター……あいつらだな」

ギルドで見たゴブリンの絵にそっくりだった。

「んじゃあ、まあ……ゴブリン退治と行きますか」

・・・

最初はまだ気付かれていないので、魔法での攻撃で奇襲し、混乱を誘う。

「よし・・・ 来たれ雷の精霊たちよ 槍となりて敵を穿て プラズマランサー！」

俺の周りに4本の雷で出来た槍が浮遊し、ゴブリンの群れに向かって放たれる。

「ギイヤヤヤヤ！」

その内の2本がゴブリンに当たり、悲鳴を上げて倒れる。

「んー・・・まだ完全には制御できてないか・・・うし、次」

ゴブリン達が俺に気づき、こちらへ近づいてくる前に次の魔法を放つ。

「来たれ氷の精霊たちよ 槍となりて敵を穿て フリーズランサー！」

この魔法はプラズマランサーの氷属性Verな感じで、氷でできた槍が敵に向かって飛んでいく魔法だ。

グサグサッ

「ギアアアア！」

先ほどよりも本数を減らして2本だけにして、制御に集中すると、どちらの槍もゴブリンに命中させることができた。

「ふむ・・・やっぱり意識の分散を少なくすると制御しやすいか・・・」

残りのゴブリンは3体。もう魔法を唱える時間はないが・・・

「ふっ（ブウンッ）」

・・・詠唱無しでプラズマソードを作り出すことができた。

「2回発動して充分イメージができあがったからたぶん行けると思ってたが・・・」

やっぱりイメージを強くすれば無詠唱でも発動できたか」

俺が試したのは無詠唱でのプラズマソードの発動。

敵が襲って来るときは詠唱している暇がない時がある。

そういうときのために練習しておきたかったんだが・・・

どうやら雷適性Sは伊達ではないようで、一発で成功してしまった。

「ま、成功して駄目なことはいらないんだけどね・・・さて、いきますか」

もうすぐそこまでゴブリンは迫ってきている。

「・・・はっ」

「ギャッ！」



まずは一番早く俺の近くにきたゴブリンを斬る。

「ふっ……」

「ギユッ！」

斬った勢いのまま右側にいたゴブリンに駆け、すれちがいざまに切り抜ける。

「ギャギャッ！？ギャギャギャギャッ！」

最後の1匹は仲間がいなくなったのに恐怖したのか逃げだそうとした。

確かに7匹で勝てない相手に1匹で戦いを挑むのは愚の骨頂だ……だがな、

「もう遅え……逃がさねえよ……！」

プラズマソードに魔力を注ぎ込む……！

「不動黒羽流 斬空刃・雷！」

俺が振りぬいたプラズマソードから出た斬撃はあっという間にゴブリンに追いつき、

「……！」

ゴブリンに悲鳴を上げさせることもなく真っ二つにした。

・・・

俺は倒したゴブリンを一か所に集めて、  
倒した証拠となる耳と体内にあるといわれる魔結晶をとりだそうと  
したんだが・・・

「・・・どうやって取ればいいんだ？」

そう、俺は解体用の道具も、ましてやナイフも持っていない。

「プラズマランサーなんかで切ったら耳が焼け焦げるだろうしな・・・」

んー・・・と悩んでいると、

「あ、そうだ、電気じゃなきゃいいんだ」

そう言つて、俺は右手に魔力を集める。

「・・・魔力の構成はプラズマソードと同じで、属性だけ氷に変える・・・！」

そうやって右手の魔力を少しずつ氷に変換していくと・・・

「・・・おお、できた」

多少形はいびつだがなんとか肉くらいなら切れそうな氷の剣ができた。

「プラズマソードが電撃を発するから氷気でも発したらどうしようかと思ったが・・・」

やはり詠唱無しで魔法を使うというのは無茶があるらしい。

魔法が発動しても構成が甘く、どこかおかしい結果になるみたいだ。

「まあそのおかげで解体作業ができるんだが・・・名づけてフリーズナイフってか？」

そんなことを言いながら俺はゴブリンの解体作業に入った。

・・・

「んー、魔結晶があつたのは2体だけか・・・」

どのゴブリンも細かく解体して魔結晶を見つけようとしたが、結局あつたのは2つだけで、どのゴブリンにもあるわけではなかった。

「まあ出てきた魔結晶は同じ場所にあつたから  
たぶん次からはこんなに時間をかけることもないと思うが・・・」

出てきた2つはどちらもゴブリンの心臓の部分で、  
どうやらモンスターは、心臓の近くには魔結晶を生み出すことがわかった。

「・・・うし、ゴブリン討伐完了。後はギルドに持って行くだけだ」  
ゴブリンの耳もはぎ取り、後はギルドに行くだけだと街に向かって歩き始めた。

「しかし魔法はもうちょい練習しないと使い物にならないな・・・」

今回の戦いではゴブリンという弱いモンスターだったから一撃で絶命させることができたが、

どうやら俺の魔法はそこまで威力が高いわけではないようだ。

「かといって威力を増やそうとして魔力を多く使えば制御しにくくなるし・・・」

実は最初に使ったプラスマランサーは4本の槍を生み出していたが、

俺は槍を生み出した時点ですでに制御しきれておらず、

全力でゴブリンの方向に意識を向かわせることで、やっと放つ事が出来ていた。

「戦場で全ての意識を一方向に向けるのは自殺行為だしな・・・」

ただ後方で魔法を放つ砲台スタイルならそれでもいいかもしれんが、  
・  
・

「俺の本業は剣を使った近接戦。とても意識を一つの方角に向ける余裕はない」

と考えると・・・近接戦では魔法は牽制用と割り切るか？

「無詠唱で2本くらい槍を生み出してとばせば牽制くらいにはなるだろ」

となると今後の課題は魔力の制御とイメージを深めることだな。

「無詠唱で魔法を作り出したうえでそれを完璧にコントロールする。まずはそれを目指すとするか」

俺はそういった今後の課題を考えながら街に向かって歩いた・・・

・・・

街にたどり着いた俺は、クエストを達成した報告と魔結晶の換金のために、まずギルドへ向かった。

「すいません、クエストの達成を報告したいんですが・・・」

話しかけたのはさきほど話を聞いたお姉さんだ。

「はいわかりました・・・ってさっきの人じゃないですか」

「ええ」

「もう討伐してきたんですか？」

「弱かったですし、すぐに見つかりましたしね。案外早く終わりましたよ」

「そうですか・・・はじめてのクエストですし、正式な流れでクエスト報告を行いましたか？」

「ええ、それをお願いします」

次も同じ人とは限らないし、ここでしっかり練習しておくか・・・

「はい、ではまずあなたが受諾したクエストを教えてください」

「Gランク、ゴブリン討伐クエスト、討伐数5です」

「・・・Gランクのゴブリン討伐クエストを受けたクロ八様ですね？」

「はい」

「ではここにゴブリンの耳をだしてください」

俺は街の外で捨てられていた布に包んでおいたゴブリンの耳を出した。

「はい、確認しました。あまりの耳も一緒に処分しますがよろしいでしょうか？」

「はい、お願いします。あと魔結晶の換金もお願いします」

「わかりました、少々お待ちください」

受付のお姉さんは渡した魔結晶を持ってカウンターの奥へ行った。

「・・・はい、クエスト達成分の報酬と、小魔結晶2つ分をあわせ  
た報酬、300ニルです」

そういってお姉さんは銀貨を三枚俺に渡した。

確かゴブリン討伐の報酬が2000ニルだったから小魔結晶1つで500ニルか・・・

小魔結晶というくらいなんだ。おそらく大きさが値段が変わるんだろ。

「ありがとうございます」

「それではこれでゴブリン討伐任務は終了です。クエストの流れは理解できましたか？」

「ああ、よくわかった」

「そうですか、それはなによりです・・・まだ時間もありますし他のクエストも受けますか？」

「ああ、そうするよ」

「ではクエスト一覧より受諾するクエストを選んでください」

「えっと・・・これとこれと・・・」

結局俺はそのあと、4つのクエストを受諾した。

・・・

「んー 結構稼げたな・・・」

その日のうちの全てのクエストを達成して、俺は合計で16000ニル手にすることができた。

「ミリヤの話によると確か1000ニルで1日暮らせるんだよな」

「―ことはこれだけあれば今日の宿は確保できるか・・・」

「さって、空も暗くなってきたことだ。どっか泊まる宿をさがすとするか」

そう言って俺は今晚の宿を探しに街へ出かけていった・・・

・・・



## 第九話 宿屋の娘（前書き）

第八話の続きです。

後半の方が半寝の状態で書いたのでわけがわからなくなってます・  
・

それでもよろしい方はどうぞお読みください。

それではどうぞ

## 第九話 宿屋の娘

「・・・どの宿にすればいいんだ？」

俺がやってきたのは街の北の一角にある宿が集まっているエリアなんだが・・・

「右も左も宿、宿、宿・・・宿ばっかだな」

さて、今俺がすべきことはいかに安くて心地よく寝ることができる宿を見つけることだ。

「つつてもどの宿も同じように見えるんだよな・・・」

どの宿も木製の2階建てで似たような建物だ・・・

「・・・お、ここよくな？」

俺がみつけたのは宿屋が並んでいる通りから少し離れた場所にある宿屋で、

他の建物の陰に隠れて少し見づらくなっている宿屋だ。

「なんだか俺の直感がここがいいと言っている気がする・・・」

まあどの宿屋でも同じだろうしこっちよ直感に従ってみるか・・・

「お、値段表だ・・・一泊朝夕ご飯付きで700ニル・・・安くね？」

他の宿は1泊朝夕ご飯付きで1200〜1500ニルだったのに対してここはその半分程度・・・

「・・・いいとこみつけたな」

俺は少しいい気分になってその宿屋に入って行った。

・・・

「こんばんはー」

建物の中は少し古くなった小さな宿、って感じで、いい雰囲気を出していた。

「はいー!」

そう言っただけ俺を迎えてくれたのは、ミリヤよりも少し年上な感じのオレンジの髪の女の子だった。

「えー、一泊泊まりたいんですけど」

「はい!一名様で一泊されるんですね?」

「はい」

「かしこまりました!料金先払いで700ニルになります!」

俺はポケットから銀貨7枚を取り出して女の子に渡す。

「・・・はい、ピッタリお預かりしました!」

それではさっそくお部屋の方へ案内させていただきますので着いてきてください!」

そう言つて女の子は奥にあつた階段を登っていく。

「・・・元気な女の子だな」

俺は苦笑しつつ女の子の後をついて行つた。

・・・

「こちらがお客様にお休みいただく部屋になります!」

案内された部屋は一部屋にベッドだけがある簡素な物だつた。

「もうすぐ夕ご飯の時間なのですが、どこで食べられますか?」

「ここでも食べられるのかい?」

「はい!下のホールで食べられるか部屋で食べられるかお好きにどうぞ!」

「そうだな・・・」

別に部屋で一人で食べてもいいんだが・・・

「・・・なあ、ここ君一人で経営してるのかい?」

ふと、そんなことを聞いてみた。

「あー・・・えつとですね、親が死んじゃったのでその後を引きついで私一人で経営しています」

「そっか・・・」

やっぱりな・・・

この宿からはこの少女以外の気配が全くと言っていいほどない。  
だから親とか従業員とかそういった本来いるべき人がいないのが気になったんだが・・・

「えと・・・やっぱり泊まるのやめますか・・・？」

「いや、やめないけど・・・なんで？」

どうしてそんなことを言うんだ・・・？

「だ、だって私なんかが一人で経営してるんですよ？  
此処に来たお客さん全員が私一人だと知ったらすぐに泊まるのをやめるんですよ・・・？」

・・・そっか、この子は怖いのか。

お客さんに逃げられても一人で経営するしかなくて、  
それでやってきたお客さんにも逃げられて・・・

・・・そりゃ怖いわな、来たお客さんがほとんどいなくなるんだもの。

「心配すんな、別にやめないよ」

「え・・・?」

「此処に泊まるさ。いい宿じゃないか、かわいい女の子に出迎えられるんだ。」

「これ以上の贅沢はないだろ?」

「・・・うえっ、えうっ、ううっ、」

「ちょ!?!どうして泣く!?!」

「お、おい、どうした、なんで泣いてるんだ!?!」

「だ、だって、私、この宿をついでから、はじめて泊まってくれるお客さんで・・・」

「ああ、もう泣くなつての・・・」

俺、この世界に来てから女の子の涙を見るの多すぎね・・・?

「ぐすっ、ありがとね・・・」

「はいはい、どういたしまして。」

「んじゃもうすぐ飯の時間なんだろ?楽しみにしてるから作ってくれないか?」

「ぐすっ、はい!誠心誠意をこめて作りたいと思います!」

「いや、そこまではりきらなくてもいいんだけど・・・」

「それでは行ってきますね!」

「ああ、ちょっと待った！」

「はい？なんですか？」

「食べる場所なんだがさ、下のフロアにするよ」

「あ、そういえば聞くの忘れてましたね、すっかり忘れてました・  
」

「んじゃ頼むよ」

「はい！」

・  
・  
・

下のフロアで待つこと30分ほど・

「できましたー！」

「おおっ！」

持ってきてくれた料理はどれもこれもおいしそうな湯気がたっていた。

「今日の料理はベクンビーフのステーキとスレサリアのソテー、そしてポーンスープとマイです！」

並べられている料理を現世の料理に例えると、ベクンビーフのステーキは牛のステーキ、

スレサリアのソテーはほうれん草のソテー、ポーンスープがコーンスープな感じである。そして・・・

「米があるのか!」

俺が驚いたのはこの世界にも米があったことである。

「米・・・とはマイの事ですか?」

「ああ!俺が住んでたところではそのマイを米とよんでいたんだ!」

「そうなんですか・・・このマイはルクセリア共和国産のもので大変おいしいんですよ!」

そんな説明が入る。

「それではどうぞ夕ご飯をお召し上がりください!」

そう言つて女の子は厨房に戻ろつとする・・・ちっ

「ああ、ちよつと待つて」

「はい?」

「今日他にお客さんいる?」

「いえ、いませんけど・・・」

「んじゃこの後は自分のご飯をたべるだけ?」



「えっと、そうですけど・・・」

そうか・・・なら。

「んじゃ一緒に食べないか？どうも一人で食べるのはさみしいんだ」  
そう言っつて夕飯に誘った。

「え・・・いいんですか!？」

「ああ、俺はかまわないんだけど・・・」

「えっと、じゃあご一緒させてもらってもいいでしょうか」

「ああ、一緒に食べよう」

「じゃあ私の分のご飯をとってきますね!」

そういつてに女の子は厨房に走って行った。

「・・・ふう・・・慣れないことをするもんじゃない・・・」

女の子をご飯に誘うとかどこのキザ野郎だよ・・・

「でもなあ・・・あの子が最初に厨房に戻ろうとした時の目を見る  
とな・・・」

あの時あの子は笑顔を浮かべていたんだが、  
よく目を見ると少し悲しみの色が浮かんでたんだよな・・・

「・・・あんな目みたらほっとけねーよ・・・  
まあ誘ったことで悲しみがとれたからいいんだがな・・・」

自分をの食事を取りに行つた時のあの子の目には悲しみの色は見えなかった。

「あー・・・でももっと他に言い方があつたんじゃねーのかー!？」

俺は彼女が帰ってくるまで自分の発言にもだえ苦しんでいた・・・

・・・

「お待たせしました!・・・あれ?どうしました？」

「いや、なんでもないよ・・・はやく食べようぜ?」

「あ、はい!」

女の子が俺とは反対側の席に座る。

「それでは食べるとしますか!いただきます!」

「いただきます?」

「あーっとな、いただきますつてのは俺が住んでいた所の言葉で食材や料理を作ってくれた人への感謝の気持ちを表す言葉なんだ」

「そうなんですか・・・」

「それよりも早く食べようぜ?」

「そうですね」

俺たちは料理を口に入れた・・・

「うめえ！こんなにうまい料理を食べたのは久しぶりだ！」

「そ、そんなことはないですよ、まだまだ練習不足ですし・・・」

「いや、俺が保証するよ、この料理は間違いなくうまい」

「そ、そうですか・・・ありがとうございます」

異世界に来てからロクなもん食べてなかったからなあ・・・

「・・・そういえば名前ってなんていうんだ？」

ふと聞いてみた。

「えっと、私はリタっていいいます」

「へえ・・・リタか・・・いい名前だな」

「あ、ありがとうございます」

少し頬を染めてうつむいている・・・変なの。

「えっと、あなたはなんて言うんですか？」

「俺の名前はレンだよ」

「レンですか・・・えっと、レンくんって呼んでいいですか？」

「ああ、なんでもかまわないよ」

自分の名前を言うときは名前だけ名乗ることにした。

この世界では名字があるのは貴族や王族だけで一般市民は名字がないからだ。

だったらいつもは名字は名乗らない方がいいと判断した。

・・・

「・・・そういえばレン君はどこ出身なんですか？」

リタと会話をしながら食事をすすめていると、リタがそんなことを聞いて来た。

「どうした？急に」

「えっと・・・レン君と話していると時々知らない言葉が出てきますし、

それに服がここの近くでは見たことがないようなつくりなのでふと気になって・・・」

・・・そっぴや俺が着てんの高校の制服だっけ。

「えつとな、俺の出身はこの大陸じゃないんだ」

「え？そっぴなんですか？じゃあゼクンディウス出身なんですか？」

「いや違うよ」

「え？それじゃあアルカディアから来たんですか！？」

「残念、それも間違いだ」

「え？じゃあどこから来たんですか・・・？」

「えつとな、俺が住んでいたのはここからずっと東の方へいった所にある島だよ」

「へえ！そんなところがあるんですか？」

「ああ」

これもギルドの仕事をしているときに考えたことだ。  
これと転移魔法の事故を合わせればまあ怪しまれんדר。

「そうなんですか・・・」

「ああ。普通に歩いていたら近くで発動した転移魔法に巻き込まれて気がついたらこの近くにいたんだ」

「へえー・・・大変だったんですね」

「ああ、大変だった。何も持っていない時にいきなり知らないところに飛ばされたんだぜ？」

よくこの街に着いたと思うよ・・・」

・・・その間にお姫様を助けた事は内緒だ。

「大変ですね・・・おかわりいります?」

「ああ、頼むよ」

俺はリタに皿を渡しておかわりを持ってきてもらった。

・・・

食事も終わりリタに俺の事を話したり、この街の事を聞いたりして  
いると、

突然リタがしゃべるのをやめて黙ってしまった。

「・・・どうした?」

「いえ・・・こんな風に誰かと楽しくおしゃべりするのはほんとに  
久しぶりで・・・」

「え?」

・・・リタは少し黙るとぼつりぼつりと自分のことを話し始めた。

「・・・半年前に親が死んでから私はずっとひとりだったんです」

「え、友達とかはいなかったのか?」

「親がいるときはいました・・・けど親が死んで少したつとだんだ  
ん皆いなくなっていくって・・・」

そしてある時から私の周りには誰もいなくなりました」

「どうして？」

「わかりません・・・一人で宿の仕事をするのが忙しくて話に行くこともできませんでしたし・・・」

その内一人でいるのが当たり前だと思うようになりましたので余裕ができてからも宿の外に出ることが少なくなりましたから・・・」

「・・・寂しくはなかったのか？」

「どうでしょうね・・・」

親が死んでからしばらくは一人でいるときに寂しくて泣いてしまふ事もありましたし、

親がいたときのことを夢見てもう一度楽しい日々をすごしたいなと思ったこともありましたが・・・」

最近は一人でいることに慣れましたからもうそんなことはなくなりましたね」

そいつって微笑を浮かべるリタ。

「・・・無理して笑わなくていいって、寂しいんだろ？」

「え・・・？」

「笑顔が固いんだよ、作られたみたいにな」

リタが浮かべた笑顔はあきらめ混じりの笑顔で、誰かとすごすことをあきらめているようだった。

「一人が寂しいんだろう？」

「そんなこと・・・！」

「いや寂しいね、俺にはわかる」

「・・・あなたに、あなたに何がわかるんですか!？」

そういつてリタは椅子から立ち上がった。

「寂しいですよ!当たり前じゃないですか!ずっとずっと一人ぼっちで・・・悲しいに決まってるじゃないですか!」

そう叫んだリタの頬には涙が流れていた。

「だけど仕方がないじゃないですか・・・!

友達だと思っていた人は皆いなくなりました!話しかけても逃げられる!近所の人には気の毒そうな目を向けられる!

逃げられるのも、同情されるのももうまっぴらです!・・・

そんなことされるくらいなら一人で宿屋に閉じこもった方がいいんですよ・・・」

そう言つてリタは手で顔を抑えて座り込んだ。

「・・・それが本音か」

「ええ、そうですよ・・・満足ですか?聞き出せて」

あ、今はカチンと来た。

「・・・ふざっけんじゃねえよ!」



「ひゃ!？」

「逃げられるのが嫌だ? 同情されるのはまっぴらだ? そんなことされるなら一人でいた方がマシだ?

甘えてんじゃねえよ!」

「・・・甘えてなんか、甘えてなんかいませんよ! 仕方がないじゃないですか!？」

私には何も思いつきませんでした!

友達との仲を元に戻す方法も、同情の目を向けられることをなくすことも!」

「それが甘えてるって言うてるんだよ! 何も思いつかないだあ? ふざけんな! だったら思いつくまで考えろよ!」

リタの考えは俺が一番嫌いなものだ。

どうにもできない、じゃあ諦めましょう。ふざけんなっつーの・・・

「何も出来ないからって閉じこもって何かが変わるのかよ!

世の中そんなに甘くはできてねえ、最後まであがいた奴が幸せになれんだよ!」

「寂しいんだろ? 悲しいんだろ? 一人でいるのが嫌だったんだろ?」

「そんな簡単にあがくのをやめんじゃねーよ!」

「もしかしたらすぐ近くに幸せはあるかもしれないんだ!」

「もう一回あがいてみるよ! リタ!」

そう、俺は言い放った。

「・・・一人であがいたって何も変わりはありませんよ」

「じゃあおれも一緒にあがいてやるよ」

「え・・・？」

言うだけ言って自分はやらないうつのも俺が嫌いなことだ。

「一人でだめなら二人で、だ。」

一人ではだめでも二人なら何か変わるかもしれないねえ、そうだろう？」

「・・・二人なら変われますか？」

「俺はそう信じてる」

「もう一度楽しい日々を夢見ていいんですか・・・？」

「そんなものはそもそも捨てちゃいけないと思う」

「・・・手伝ってくれるんですか？」

「ああ、お前がまた幸せに過ごせるようになるまで手伝ってやる」

「だからもう一度頑張ってみろよ、リタ」

そういつて俺はリタに手を差し出す。

「お前がもう一度頑張るって言うならこの手を取れ、そうりゃ俺は

お前を全力で手伝ってやる」

「・・・」

リタは俺の手をじっと見つめる。

「・・・じゃあ」

「じゃあもう一度だけ頑張ってみます」

「あの時夢見た幸せな日々を現実にするために・・・」

「だからレン君、手伝ってください」

そういつてリタは俺の手を取った。

「ああ！」

「・・・ありがとう、レン君・・・」

リタは俺の手を握ったまま涙を流していた・・・

・・・

あの後俺はリタに寝るように伝え、自分の部屋に戻ってきた

「ふう・・・この世界に来てから女の子のことに巻き込まれるのが  
多くねえか俺？・・・」

この世界に来てまだ3日で二人の事に巻き込まれるって・・・

「まあそれは置いておこう。とりあえず今はリタのことだ」

リタの問題は解決が難しい・・・

「さつきはあんな事言っちゃったけど具体的にどうすりゃいいのかわかんねえな・・・」

近所の人の同情の目をなくして普通にリタに接しさせる。

なぜリタの友達がいなくなったのかを調べてリタの友達を増やす。

「どっちも難しいな・・・同情の目を無くすってどうすりゃいいんだ？」

「あー・・・駄目だ、睡魔がやばくて考えが纏まらねえ・・・」

久しぶりにまともなベットで睡魔がやべえ・・・

「しょうがねえ、とりあえず寝るか・・・」

俺は睡魔に降伏宣言をあげてる。

「おやすみ・・・」

そうして目をつぶると、俺はすぐに深い眠りに落ちて行った・・・

## 第九話 宿屋の娘（後書き）

・・・はい、ということで第九話 宿屋の娘でした。

ながかった・・・やっと寝られる・・・

・・・他のキャラがみんな寝ているのでこれで終わりますね。

それではみなさん、またこんど・・・

・・・zzzzzz

1月9日、後半部分を大幅に修正しました。

寝て起きて見直してみたら後半の無茶苦茶にびっくりしたもので・・・

以下、追加のあとがき

黒「・・・あれ？俺ってあんな熱血キャラだったけ？」

いやー、最初は静かにリタをなだめようと思ってただけど書いてる途中でだんだん楽しくなっちゃって・・・  
まあ後悔はしていないけど

黒「しろよ!」

やだねー、楽しかったんだから問題ないさ

黒「お前は楽しくても評価するのは読者なんだよ!っていうか元と

変わりすぎじゃね？後半」

いやー、眠い中なんとか仕上げて投稿したのをあらためて読んだらアルエー

な出来だったもんで。

黒「まあ確かに元のは変だったけど……それにしても変わりすぎだろ」

まあ元の小説を読んでくださった読者様には申し訳ないけどね……

黒「……読んでくれてる人いるのか？この小説」

グハツ「……い、痛いところを……いいんだよ！俺がいると思ってるんだからいるんだよ！

黒「なんという暴論……そこに痺れない憧れない」

黙つとけ！……まったく……それではみなさん、こんな駄小説を読んでいただきありがとうございます。

黒「大分長くなってしまいましたがここで終わりたいと思います」

それでは！

黒「また今度ー！」

## 第十話 怒りと決意（前書き）

設定集を書くか書かないか迷っています・・・  
設定集があつたほうがいいんでしょうかね？

はい、というわけで第十話 怒りと決意です。

いつもの如く駄文ですがそれでもよろしいかたはお進みください。

それでははじめます。

## 第十話 怒りと決意

チュン、チュチュン、チュン

「・・・ん、朝か・・・」

鳥のさえずりと朝の日差しで俺は目覚めた。

「んんっ・・・」

大きく伸びをしながら体の調子を確認する。

「・・・うし、魔力ももどってるし万全そのものだな」

昨日消費した魔力は全体から見れば微々たるものだが、やっぱり回復していればうれしいものである。

ガチャッ

「レン君、おはようございます」

扉を開けてリタが入ってきた。

「ああ、おはよう」

「朝ごはんの用意ができていますので準備ができたなら下に降りてきてください」



「ああ、わかった」

「それでは」

そう言つてリタは部屋から出て行つた。

「・・・準備つつたつて別に何もなしな・・・行くか」

俺もその後が続いて部屋から歩き出した。

・・・

朝食後、これからの事をリタと話しあつていた。

「それでレン君、具体的にはどうするんですか？」

「とりあえずギルドの仕事しながら色々話を聞いてみたいと思う」

「ギルドの仕事ですか？」

「ああ、今は収入がそれしかないからね。初めは一泊だけのつもりだったから稼がないとここに泊まれないし」

「そうなんですか・・・別にお金払わなくてもかまいませんよ？一人も二人も変わりませんし」

「・・・その台詞は経営者としてはどうかと思つぞ？まあいいから気にすんなつて。どうせ金はあるんだし」

武器を買つにしても宿屋に泊るにしても金がいるしな・・・

「まあそういうことで今日はギルドに行ってくる」

「わかりました。もう出るんですか？」

「ああ、早いうちから言っただ方が仕事をする時間が多く取れるしね。というわけで行ってくる」

「はい、お気をつけて」

俺はリタに見送られてギルドに向かった・・・

・・・

「すいません。ギルドの仕事を受けたいのですが・・・」

「はいわかりました・・・って昨日のハンターさんじゃないですか」

「あれ、昨日のお姉さん？よく覚えてますね・・・」

「あの能力を見たら嫌でも覚えますよ・・・」

「あ、あはは・・・」

まあそうかもしれんな・・・

「で、ギルドの仕事でしたね？ではギルドカードを提出してください  
い」

「はい」

カウンターの上にギルドカードを置く。

「レン様ですね。ではこちらのクエストからお好きな物をお選びください」

「んじゃあれとこれとこれと・・・あとこれと」

「い、5つですか・・・？」

「ええ」

「わ、わかりました。・・・この5つのクエストですね」

「はい」

「ではよろしくお願いします」

「んじゃ行つてきます」

そう言つて俺はギルドから外に出て行つた。

・・・

「・・・ 来たれ氷の精霊よ 槍となりて敵を穿て フリーズランサー！」

ギイヤヤヤヤヤヤ・・・

「これで討伐のクエストはおしまいっ」と

今日受けた5つのクエストは3つが討伐のクエストで、残りの2つが採取クエストだった。

「ゴブリン5体とウルフ3体とビー8体の討伐が、案外早く済んでよかった」

ウルフは小型のオオカミのようなモンスターでゴブリンと同じく集団行動を好み、

1体1体は大したことはないが、大型のウルフの上位種、ベルウルフがリーダーとなって群れを率いている場合は注意が必要らしい。ベルウルフが仲間に指示を出し、連携して襲ってくるからだそうだ。

「今回見つけたウルフの群れにはいなかったがな・・・」

そしてビーは、ヒトの顔くらいの大きさの巨大な蜂のようなモンスターで、

針には神経性の毒があるらしい。・・・わかりにくい人は某狩猟ゲームの某モンスターを思い浮かべてくれればそれで大体あっている。

「あの野郎・・・ブンブンブン飛び回りやがって・・・全然当たんなかったじゃねえかよ・・・」

こちらが斬ろうと瞬間に上空に飛び上がったか、魔法を放とうとしたらいきなり近くによって来たりしてなかなか倒せなかった・・・

「まあ最後にはキレてメルトストーンで焼き尽くしてやったがな・・・」

あの時はなぜか完璧に制御することができて、狙いを誤らずにビー

の真下から溶岩が噴出した。

「しかし魔法を使う時にいちいちプラズマソードを消さなければいけないのは面倒だな・・・これも要練習だな」

ビーを倒すときにいつ近くに飛んできてもすぐに斬れるようにプラズマソードを展開したまま魔法を放とうとしたんだが・・・

「まさか暴発するとは・・・」

結果はどちらの魔法の制御も狂って暴発。おかげでプラズマソードを握っていた方の手を少し火傷してしまった。

「まあとつさに制御を離して手から離れたからその程度ですんだんだろうけどな・・・火傷自体ウインドヒールで治ったし」

まあ修練あるのみだな。

「うし！んじゃあはぎ取りも終わったし次は採取に行くか！」

採取クエストで取ってくるように依頼されたのは、花見草が5つとカジキノコ10個だ。

花見草はあらゆる花の近くに生える草で、生えているところの近くにある植物の育成を促進し、

はやく育たせる効果を持つそうで、そのため花を栽培している人にとっては価値のある植物らしい。

カジキノコは食用のキノコで、しいたけのようなキノコだそうだ。

どちらも森のなかで採取できるそうで、危なくて森までいけない人がよくハンターに頼むらしい。

「この近くで森っつーと・・・あそこか」

俺は近くにあつた森に向かって歩みを進めた。

・・・

「へえ・・・意外とたくさん生えているもんなんだな・・・」

森の中には植物がたくさん生えていて、その中には目的の花見草とカジキノコもあつた。

「1、2、3、4、5・・・うし、これでよしつと」

俺は布の中に包み、早々にここを離れることにした。

「なんかでそうなんだよなここ・・・妙な気配するし・・・」

さつきからどうも変な感じがする・・・

「・・・（ブルルルッ）ま、まさかな、大丈夫だろ」

結構奥まで来てしまったので俺は急いで元来た道を引き返した・・・

・・・

あれから俺はとくに何に出会っわけでもなく街にたどり着くことができた。

「んー・・・なんだっただろうなさつきの気配・・・」

確かに何かの気配がしたんだがな・・・

「っと、着いたか・・・考えて何かわかるわけでもないしとりあえず入るか」

そういつて俺はギルドの建物に入って行った。

「すいません。クエストの報告に来ました」

話しかけたのはさきほどのさきほどのお姉さんだ。

「もう来たんですか！？まさか全部終わらせたんですか！？」

「はい」

「・・・どんなペースでこなしたんですか。まだ受諾してから2時間たってませんよ・・・」

「あれ？まだそれだけしか経ってませんか？」

「はい」

あー・・・しまったな・・・腕時計で時間確認すりゃよかった。

「まあ思ったよりも結構早く終わったんで。案外簡単でしたし」

「そうですか・・・やはりあれぐらいの能力になるとそんな感じになるんですね・・・」

あんまし目立ちたくないのになにしてんだ俺・・・まあいいか。

「それでクエストの結果なんですが・・・」

「あ、はい、では討伐した証拠品と採取品を出してください」

「はい」

布から集めた物を出す。

「・・・はい、すべてそろっていました。魔結晶はございますか？」

「はい、全部で6つです」

今回は討伐したモンスターが多かったせい結構取れた。

「えっと・・・全部小魔結晶ですね。ではお預かりします」

お姉さんに魔結晶を預ける。

「ではこれがクエストの報酬と魔結晶の回収金を合わせた分です。全部で1400ニルになります。」

また、今回のクエスト成功によりGランクでのクエスト達成数が10になりましたのでFランクへと昇格します」

「あれ？もうですか？」

「普通は1日に1つ、多くても2つくらいしかクエストは達成できないので一週間以上はかかるのですが・・・あなたの場合は1日に5つというすごい数ですからね・・・」



・・・マジか、結構簡単に終わるからってつきりこれくらいは皆いけるのかと思ってたぜ・・・

「まあそういうことであなただはFランクへ昇格です。おめでとございます」

「・・・なんかなげやりですね」

「あなたに付き合つと驚く事が多すぎるので適当にこなすことにしました」

・・・それでいいのかギルド職員？

「昇格したことでギルドカードに変更があるのでギルドカードを渡してください」

「はい」

「お預かりしました。では変更には少々お時間がかかりますのでこちらの席でお待ちください」

「わかりました」

「では失礼します」

そういつてお姉さんはギルドの奥へはいつていく。

「・・・待つか」

俺は言われた通りに席に座って待つことにした。

・・・

しばらく待つとギルドの中に騒がしい一団が入ってきた。

「・・・ぎやははははは！今日も大漁だ！」

「そうっすね兄貴、こいつは報酬に期待できますね！」

「そ、そうなんだな」

・・・なんつーモブっぽい奴らだ。

「お待たせしました」

カウンターからお姉さんが近寄ってきた。

「こちらお預かりしていたカードになります。ご確認ください」

そう言っただけ渡されたカードを見ると、GだったランクのところはFに変わっていた。

「ありがとうございます・・・あいつらのこと知ってますか？」

「あいつら・・・？・・・ああ、マスカー兄弟のことですか？まさか知らないんですか？」

「ええ、何分最近この近くに来たもので・・・」

「そうですね・・・あの人たちには関わらない方がいいですよ」

「関わらない方がいい・・・？」

「ええ、あの人たちは自分たちのハンターランクが高いからっていつも威張り散らして・・・」

色々あくどいことをしているという噂もありますし・・・」

そのマスカー兄弟とやらはギルドに入ってきた後酒を飲んで笑い声をあげていた。

「ああいう風に昼から酒を飲んでうるさくするのでギルドとしても困っているのですが・・・実力は確かで受けたクエストは確実に達成するので中々文句も言いづらいんですよ・・・」

「ふーん・・・」

マスカー兄弟の話が聞こえてくる。

「しかしおもしろいよなああの女！」

「そうっすね兄貴！」

「そ、そうなんだな」

「けけっ、おもしろかったなあ、あいつが夜になるたんびに泣きわめく様子はよ！」

「ですね兄貴！」

「そ、そうなんだな」

酒が入ってきて興奮してきたのかますます声が大きくなってくる。

「しかし最近はずまんなくなっちまったもんだよなあ・・・ほとんど泣かなくなっちまったし」

「そうっすねえ・・・全然おもしろくないっすねえ・・・」

「そ、そうなんだな」

「というか兄貴、どうやってあいつをおとしめたんで？」

「ん？聞きたいか？」

「はい！」

「そーかそーか！確か・・・あれは半年前のことだったな」

半年前・・・？確かリタの親が死んだのがそれくらいだったな。

「あれくらいの時に少し大きなクエストに失敗しちゃってなあ・・・その時にな、ある女の親が死んだって話を聞いてな、こいつは憂さ晴らしのいい機会だと思ったんだよ」

「俺はその話を聞いてからそいつの交友関係をしらべてなあ。そいつの友人と思わしき奴を脅してやったんだ」

「楽しかったぜ？俺を恐れた奴が次々とそいつの周りから離れて行くのを見るのは！」

「そいつの近くに住んでるやつは俺が関わってるそいつにヘタに触れて俺の怒りをついたらと思って近づかない」

「結果、そいつは一人ぼっちになったわけだ！」

「へえ、流石兄貴っすね！ずる賢さでは天下一品！」

「頭を使ったといえ頭を」

「それで兄貴がいじめたそいつの名前は？」

「なんだ？気になるのかお前？」

「へえ、せっかくなんで聞いてみたいっす」

「ふうん・・・いいだろう教えてやるよ」

「ありがたいつす！」

「確かそいつの名前は・・・」

「リタ、だったと思うぜ？」

その声を聞いた瞬間、

「おい」

「あん？何だおま、ぐああっ！？」

「あ、兄貴!？」

俺はそいつを思いっきり殴り倒した。

「こ、この野郎、なにしゃがる!」

「お前なんかのせいであの子は苦しんだのか・・・!」

「ああん!? 何言つてやがるお前!」

「お前なんかのせいであの子が苦しんだのかって言つてんだよ!」

「何だ!? お前俺に逆らつて生きていられると思つてんのか!？」

「あ、兄貴、俺こいつ知ってますよ! 確か昨日リタの宿に泊まつたやつだ!」

「あん?・・・は! お前あの女に惚れたクチか? だから怒つてんのか?」

「ちげえよ・・・けどな、お前なんかガリタを苦しめたつて言う事だけでキレる理由には充分なんだよ!」

こいつがあの子を苦しめている・・・そう思うと俺の口は勝手に言葉が発していた。

「悲しんでたんだよ! 苦しんでたんだよ! あいつは! 親が死んで一人ぼっちで! 誰も頼るやつがいなくて、それでも一人で頑張つていて・・・なのになんであいつをいじめられる!？」

「はあ！？あいつの事なんぞ知るか！要は俺が楽しいかどうかなんだよ！」

こんな・・・こんな奴の身勝手であいつは苦しんだのか！

「・・・もういい、お前は潰す！」

「ふん、上等だ！表に出ろ！俺を殴ったことを後悔させてやる！」

「それはこちらのセリフだ・・・リタを泣かした事、後悔させてやる！」

「はん！せいぜい頑張ることだな・・・おい、そこをどきやがれ！」

そいつの声で他の人が道をあける。そいつは先にギルドから出て行った。

「あ、あなた、どういっつもりですか！？マスカー兄弟に喧嘩を売るなんて・・・！あなた死にますよ！？」

ギルドのお姉さんが血相を変えて俺の前に立つ。

「マスカー兄弟の長男、ヴェルガのハンターランクはB！あなたのハンターランクはF！どう考えても無理です！」

それを聞いた周りの人がどよめき始める。

「すぐにやめるべきです！頭を下げて謝っても・・・！確かにさつき言っていたことは許される事ではありませんけど、所詮は他人の事じゃないですか！それで命を捨てるなんて馬鹿のすることです

よ!？」

「・・・たしかに無謀かもしれん。ひょっとしたら死ぬかもしれん。あなたが言っただ通り馬鹿なことかもしれん」

「でしたら・・・!」「けどな!」

「けどな・・・約束したんだよ、リタを手伝ってやるって。幸せな日々を取り戻すのを手伝ってやるって!」

「あいつは泣いていて俺はそれをなんとかしてやりたいと思った!」

「だから俺は行く。リタのためじゃない。これは俺がしたいからするんだ!」

リタのため、なんて高尚なことは言えない。結局はただ俺がなんとかしたいっていうわがままなんだから。

「あいつを倒して、ぜってえにリタには関わらないように誓わせる!そうすりゃもうリタは逃げられることもないし、一人ぼっちで過ごすこともない!悲しむ事もない!」

「行かせてもらっぜ」

俺が横を通り過ぎても、お姉さんは止めることはなかった。

「かならず・・・かならず勝ってくださいね」

後ろからそんな声が聞こえてきた。



「ああ・・・もちろんだ」

そう言っ  
て俺は外の広場へと出て行った。

「・・・ぜってえ潰す」

決意を固めて・・・

## 第十話 怒りと決意（後書き）

はい、ということで第十話 怒りと決意でした。いやー主人公よ、燃えてるねえー

黒「俺は弱い者いじめが大嫌いだからな・・・あいつは潰す」

おお、こわいこわい・・・この主人公は怒らせると怖いですよー？  
というわけで蓮が怒っているので私だけで進めます。

今回蓮がこんなに怒っているのはリタが泣いていたのは他人の楽しみ  
のせいだとわかったからです。

もしこれがリタにも原因があるならばこんなには怒りませんでした  
が、

今回は全くリタに非がなく、他人のうさばらしに巻き込まれたとわ  
かったのでキレました。

蓮は理不尽というものが大嫌いで、誰かが理不尽に巻き込まれてい  
ると知ると、

その人を苦しめている者に対してもものすごい怒りを向ける、という  
設定も実はあったり・・・

黒「・・・ふふふふつ、どう料理してやろうかなあの野郎」

・・・さて、黒が怖くなってきたのでここで終わりたいと思います。  
皆様、相も変わらない駄文で展開も急な話でしたが、読んでいただ  
いてありがとうございます。

それではみなさん、また今度

## 第十一話 Bランクの実力、Fランクの底力

広場ではヴェルガとかいう野郎が布を巻いた斧を持って待っていた。

「遅かったじゃねえか・・・てつきり逃げたのかと思ったぜ？」

「は、誰がお前から逃げるってんだよ」

「てめえ・・・言うじゃねえか。聞こえてたぜ、お前、ハンターランクFなんだろ？俺のハンターランクはB、かなうわけがねえじゃねえか」

「それがどうした？」

「は！お前知らねえのか？ランクは絶対的な力の差を示す！FがどうあがいたってBにはかなわねえんだよ！」

「・・・力の差？FがどうあがいたってBにはかなわねえ？・・・俺はっ、馬鹿げてるな」

「・・・いい度胸じゃねえか。てめえが俺に土下座して謝るんならまあ一発殴るだけで勘弁してやろうと思ったが・・・やめだ。てめえをいたぶって、この俺にたてついたことを後悔させてやる・・・！」

「ごたくはいいんだよ・・・そうだな、いい事を教えてやる。俺のランクはFだがな、上がったのは今日だ」

「・・・はははははっ、ははははははは！お前バカじゃねえの？昨日までGだったんならなおさら無理だろうが！」

「ふん・・・じゃあ見せてやるよ。お前が馬鹿にする、フランクの強さってやつをな」

リタを泣かした事、後悔させる・・・！

「やってみせろやあ！！！」

そういつてヴェルガは俺の方へ突っ込んでくる。

「この斧で叩き潰した気に入らない奴は49人！お前で50人目だ！」

「・・・じゃあ宣言しといてやるよ、その叩き潰される50人目はお前だ」

「ほざけえええっ！」

ヴェルガが俺に向かって斧を振り下ろす。なるほど、確かに言うだけの事はある。斧を振り下ろすスピードはなかなか速い。・・・だが、

「ふっ！」

見切るなどたやすい！

「てめえ・・・よくかわしたじゃねえか。

じゃあこいつはどうだあ！サクセッシュionsラッシュ！」

ヴェルガが斧を連続で振り回す。

「ふっ、はっ、せやつ！」

俺はそれを最小限の見切りでかわし続ける……！」

「この……ちょこまかと、動くんじゃねえー！」

ヴェルガが大きく斧を振りかぶる。

「ここだ……！プラズマランサー！」

俺は今日のクエストの合間に練習した無詠唱でのプラズマランサーを一発放つ。

練習の成果でとりあえず一発だけなら無詠唱で放てるようになった。

「ぐああっ!？」

魔法は狙いたがわずヴェルガの体に命中する。魔法が命中したことによる痺れによりヴェルガは大きな隙をさらしていた。

「いくぞ……不動黒羽流……」

「ぐっ、ぐあっ、ぐああっ！」

その間にプラズマソードを作り出し、ヴェルガを唐竹、左斬上、右薙と連続で斬り裂く。

そしてヴェルガに向かって腰溜めに構えて、

「四爪連斬！」

「ぐあああああっ！」

左薙に切り抜ける・・・！

「こ、この野郎、武器も持たないでどうするかと思えば魔道士かよ  
！」

「ちっ、あまり効いていないか・・・」

プラズマランサーと合わせての五連撃だったがヴェルガはピンピン  
していた。

「はっ！俺がBランクにいる理由の内の一つが生まれ持ったこの打  
たれ強さと怪力だ！たしかに雷属性の魔法を喰らえばちと痺れるが・  
・この程度の威力ならどれだけでも大したダメージにはな  
りやしねえ！」

「・・・筋肉馬鹿ってやつか」

「あんだとお！？」

「打たれ強い、怪力・・・やっぱ筋肉馬鹿だろ」

「この野郎・・・よほど死にたいようだな・・・！ちっ、敵の挑発  
に乗るんじゃないやねえ俺」

などと軽口を叩いてみるが結構まずい。プラズマソードが使えない

となるといつきに俺の攻撃手段が少なくなる。プラズマランサーやフリーズランサーじゃたいしたダメージにならない。かといってメルトストーンとかの高威力の魔法は詠唱している暇がない・・・

「仮に詠唱する時間があつたとしてもここじゃ周囲を巻き込む・・・

」

俺たちが戦っているのは街のど真ん中にある広場。とうぜん周りには人々を取り囲んでおり、ヘタな魔法はその人たちを巻き込むことになる。

「やはり近接戦闘でけりをつけるしかないか」

結論が出たところでヴェルガが落ち着いて来た。

「ふー・・・しかし思ったよりもやるじゃねえかお前。たいしたものだよ、Ｆクラスなんかが俺を傷つけられるたあ思ってたぜ」

「ふん・・・お前になんかに褒められてもうれしくないね」

「まあそういうなよ、お礼にいいものを見せてやるよ」

そついうとヴェルガは、斧に巻かれていた布を外していく。

「正直お前なんかに使つようなもんでもねえが・・・まあ偶にはいいだろ」

そうしてヴェルガは布を完全に外した斧を振り下ろした。布が外された斧は真っ黒で、刀身の中央には緑の宝玉が取りつけられていた。



「これが俺がBランクまで上がったもう一つの理由・・・相棒、ガトーノヴァ」だ」

斧からは奇妙なオーラが漂っているように見え、邪悪な気配がした。

「なんだ・・・そいつは？」

「こいつは魔装具だ。それもBランクの貴重な物だぜ？」

「魔装具・・・？」

「呆れた・・・魔装具も知らねえのかよ」

「ふん、お前にはどうでもいいだろ」

「まあ確かにそうだな・・・つと、そこまで教える義理は俺にはねえぜ？他の誰かに教えてもらいな・・・但し、この戦いに生き残ればの話だがなあ！」

「っ！」

来る！

「さっきまでは油断していたが・・・こっからは本気だ！お前を殺すまで俺は止まらねえ、行くぞお！」

「なっ！？」

さっきまでとは速さのケタが違う！？

「喰らえ！」

「くっ・・・！」

なんとか初撃はギリギリかわせた・・・

ヴェルガが振り下ろした斧は大地に小さな亀裂を走らせていた

「なんつー馬鹿力だ・・・さっきまでとは全然違うぞ・・・！」

あんなの喰らったらマジで死ねるぞ・・・！

「よくかわしたな・・・だが今度は外さねえよ！喰らえやあ！」

「やばっ！」

まずい、反応が遅れた・・・これはかわせん・・・！

「くっ、（シールド）！」

無詠唱で簡易の防御障壁を張る。

「無駄だ！死ねえええええっ！」

「ぐはあっ！」

だが斧の一撃は障壁を紙の如く破り、俺その一撃をもろに喰らって  
ふっ飛ばされた。

「くっ！やべえな・・・」

今の一撃で内臓が傷ついたのか口から血が出てくる。

「・・・癒しの風よ 傷つきし者を包みて 争いの傷を消さん  
ウィンドヒール・・・」

応急処置にしなければならないが自分の体に治癒魔法を使う。

「あん？・・・今はイツたと思ったんだがまだ生きてやがるのか・  
・・・」

「は・・・俺はあんなもんじゃ死なねえよ・・・」

とはいっても今の今は効いた・・・治癒魔法で外見の傷は消えているが、斧が当たった衝撃で体は若干言いつときかねえし、腹はズキズキ痛むし・・・

「まだ無駄口叩く余裕があるのか？お前。じゃあ今度は・・・全力でブツ叩いてやるよ！」

そういいながらさっきよりも速いスピードで俺に突進してくるヴェルガ。

「・・・ 我が円卓は守護の証・・・」

集中しろ・・・さっきは突破されたが、今度はそうはいかねえ・・・  
！

「されば我は彼の者を守る盾とならん ！ラウンドシールドお！」

俺の目の前に円形の盾が展開される。

それは先ほどのよりも存在が確かで、強く輝いていた。

「・・・馬鹿な！ありえねえ！？俺の一撃を止めるだと！？」

「おおおおおおおっ！」

俺が展開した盾とヴェルガが振り下ろした斧はぶつかり合い、激しい風を巻き起こしていた。

「この野郎・・・調子乗ってんじゃねえぞお！」

斧の力がさらに強くなる・・・それと呼応するかのように斧の宝玉が怪しく輝いていた。

「ぐううう・・・負けて・・・たまるかつーの！」

負けじと盾に魔力を注ぎ込み、さらにその存在を強化する。

「うらああああああっ！」

「おおおおおおおっ！」

互いに譲らじと激しくしのぎを削る。

そして・・・

「くっ、この野郎・・・俺の一撃を耐えやがった・・・」

しのぎあいの軍配は俺に上がった。

「はあ・・・はあ・・・ギリギリだった」

危なかった・・・！もう少し力を入れられてたら先に魔法の構成が限界を迎えてた・・・！

「だがこれでお前の攻撃は止まった・・・今度はこちらの番だ・・・借り、返させてもらうぜ！」

このままあいつの攻撃に付き合ってたら先に俺の体がダメになる・・・その前に決着をつける！

「いくぞっ、雷牙！」

ヴェルガに一気に近づき、プラズマソードにさらに雷を剣に纏わせて一閃する。

「ぐうつ！・・・そんなもの、効かねえって言ってんだろっが！」

確かにヴェルガは対してダメージを受けた様子は無かった。だが・・・

「なら連撃ならどうだ？」

「何・・・？」

「俺はもうすでにお前のふところにいる・・・お前にできるのはただ耐える事だけだ！」

単発なら対して効かなくても、それが積み重なれば大きなものにな

る。

そして、それが出来る技を、今の俺は持っている……！

「覚悟しろよ……まずはお前に付けられた傷の分を返す……」

雷牙で纏わせた雷に加え、さらにギリギリまで魔力を剣に注ぎ込んだ。その結果、黄色く光っていたプラズマソードは青白く光り、バチバチと音を立てて雷を発している。

「プラズマソード・フルブースト……！」

いくぞ……

「……不動黒羽流……奥義！」

「一！」

「ぐはっ！」

「二！」

「がはあっ！」

まずはヴェルガの体をプラズマソードで斬り裂き、そして蹴って前にふっ飛ばす。ふっ飛ばした時に

「三！」

「ぐふっ……」

「四！」

「ごぼっ！」

「五っ！」

「ぐはあっ！」

ふっ飛ばしたヴェルガに追いつき、左斬上、右斬上、逆風と三連続で斬り上げる。

「いくぞ・・・こっからは・・・お前に悲しめられたリタの分だ・・・」

「なんだと・・・！」

「言っただろう・・・借りは返すと！リタの分も含めて返させてもらうぜ！六、七、八い！」

「ぐっ、ぐはっ、がはあっ！」

逆風で斬り上げた勢いのまま上へと跳び、斬空刃を三連続で飛ばす。

「んで・・・九！」

「ぐああああっ！？」

そのまま重力のままに落ち、ヴェルガの頭に唐竹を喰らわす。そして着地した勢いのままその場で回転し、

「とどめだ・・・雷神連牙、十連斬！」

「がああああああああっ！」

振り向きざまに左薙で切り裂いた・・・

「どうだ・・・？」

夢の中で新しく覚えた奥義だ・・・今の俺のではこの技が一番攻撃の回数が多い。

これが効かなければもう俺に打つ手はあと一つしかないんだがな・・・

・

「ぐはっ・・・くそっ、やりやがったな・・・殺してやる・・・殺してやらああああ！」

「・・・うわー、あんだけ斬ってまだ元気だこいつ。どんだけ頑丈なんだよ・・・」

とはいえ・・・

「くそっ、なんでだ、なんで体が動かねえんだ！」

「さすがにそれだけ体に電撃が走れば動かんだろう」

プラズマソード・フルブースト。大層な名前だが単にプラズマソードに魔力を限界まで注ぎ込んで強化することで、その威力を爆発的に上げる力任せの強化・・・まだ構想だけで試した事は無かったが、状況を打開するにはこれを使っしかないと思い使用した。



フルブースト状態になると短時間しか制御できず、ひとつの技の間ぐらいしか使用することができないが。この状態の剣には並の人間なら一撃でも喰らえば昏倒するほどの量の電流が流れている。

今回はそれを十回も喰らわせたんだ・・・気絶しないのでも不思議なくらいだ。

「さて・・・時間をおいて麻痺が取れても厄介だ。今のうちにけりをつけよう。」

そう言つて俺は、ヴェルガが落としていた斧を手に持つって重！？これを片手で持ちあげるってどんな馬鹿力だよ・・・

「てめえ！俺の斧にさわんじゃねえ！」

「返してほしかったらもうリタとその周りの人に近づかないって誓いな」

「誰がてめえなんかに「ズガアアアンツ！」・・・死にたいか？ヒイ！？はい、誓います！」

斧を地面に振り下ろして亀裂を作るとヴェルガは簡単に誓ってくれた。

「誓ったな・・・んじゃあもうリタに関わんなよ・・・関わったら俺が潰す」

「はい、もう関わりません！・・・だ、だから解放してくれませんか？」

「ふん・・・」

斧を持ってヴェルガに近づいて行く。

「て、てめえ・・・まさか・・・や、やめろ、やめてくれ・・・！」

「殺さねーから安心しろ・・・というか殺すなら誓わせる意味がねえだろうが・・・」

「そ、そうですか」

「だがな・・・」

「ひっ!？」

「てめえはリタを泣かしたんだ・・・当然しっぺ返しを食らう覚悟はできてんだよなあああ！」

「ひiiiiiiiiい!？」

「喰らえや・・・自分の斧の一撃とやらをお！」

「ぎゃっ!」

斧の柄の部分で頭を殴ると、ヴェルガは気絶して倒れてしまった。

「そ、そんな、兄貴が、兄貴がやられるなんて・・・」

「た、たいへんなんだな」

見物人たちの輪の中にいたヴェルガの取り巻きがわめいている。

「・・・お前らもこうなるか？」

「ひい！？け、結構っす！」

「お、オイラもなんだな！」

「じゃあさつさとどっかへ行け・・・」

「は、はい、失礼しました（たんだな）ー！！」

取り巻きたちがヴェルガを持ってどっかへ行ってしまう。

ヴェルガ達がなくなったことでにわかに見物人たちがざわざわし始めた。

「・・・すげえ、あの兄ちゃんヴェルガに勝っちまった！」

「見たか！？あのヴェルガの怯えきつた顔をよお！」

「ヴェルガ達が逃げ帰るときどんなにすっきりした事か！」

「あのヴェルガを倒したお兄さん誰だろう！」

「・・・あー、また面倒なことになりそうだ。」

「でも、ま・・・今はどうでもいいや・・・おい！周りで見ている人達の中にリタの友達だった人はいるか！？」

そう俺が叫ぶと、群衆の中から10名ほどの少年少女が不安そうに

出てきた。

「な、何ですか？」

「ああ、そんな怖がらなくていい。少し頼みたい事があるだけだから」

そういうと少年たちの顔から少し不安の色が消し去った。

「えっとさ、君たち元々はリタと仲良くしてた子たちかい？」

「は、はい、そうです」

少女が答えた。

「ヴェルガ達に脅されてリタから離れて行っただんな？」

「はい・・・一人ずつ呼び出されて、「リタとかいう小娘に近づくな。もし近づいたら・・・大変なことになるかもしれないねえ・・・？」と言われて・・・」

・・・下種だが小悪党みたいな言い方だな。

「わ、私たち、本当はリタの親が死んでから、慰めてあげようと思っただけにいたったんです！で、でもヴェルガ達に脅されて仕方なく・・・」

「ああ、別に疑ってるわけじゃないからいいよ」

「そ、そうですか・・・それで、僕たちに一体何を頼むつもりです

か？」

「ああ、君たちにとっては簡単なことだよ。昔みたいにリタと一緒にいて遊んであげてほしい」

この子たちがリタを嫌がっているわけじゃないのなら大丈夫だ・・・

「リタは今一人ぼっちですごく寂しがっている。だから君たちがリタといってくれば寂しさも薄れると思うんだ。だからどうか、頼む」

そういつて俺が頭を下げると、少年たちは顔を見合わせて頷きあった。

「顔をあげてください・・・もともと僕たちはリタが寂しがっていたのに気が付いていたんです。でも自分の身惜しさにリタのために何もできなかった・・・だけど、あなたがリタの寂しさに気がついて、その原因だったヴェルガを倒してくれた。なら僕たちがリタと仲良くしない理由はありません。な、皆！」

「うん（ああ）（ええ）！」「」

「だから大丈夫です・・・リタにはひどい事をしました。許されなくても仕方がないと思っています。ですが、できるならばもう一度リタと仲良くなって一緒にいたいと思っています」

「そっか・・・」

おそらくリタはこの子たちを許すだろう。そもそもこの子たちに罪は無いのだから。だがそれを俺が言うことはない。それはリタ自身が言うべきことだ

ろうから。

「んじゃ君たちを集めたのはそれだけだよ。・・・俺が言うべきことではないかもしれないけど、リタと仲良くできることを願ってるよ」

「いえ、あなたのおかげでリタに謝り、そして仲良くできるチャンスができました。あなたには感謝しています。・・・ありがとうございます」

「「「ありがとうございます」」」

「いや、これは俺がしたかったからやっただけだよ。君たちが感謝する事はない」

「そんな・・・」

「俺に構うよりも早くリタのところに行ってやってくれないか？寂しくしてるだろうし」

「・・・はい、わかりました」

「ん、んじゃリタのこと頼むよ、それでは」

「はい」

少年たちは広場からリタの宿の方向へと走って行った。

「さて・・・あと俺がやるべきことはひとつ」

俺はこの広場にいるひと全員に聞こえるように息を吸った。

「リタの宿、隠れた名店、Pleasant プレズントスペース spaceにぜひご来店を！従業員はたったの一人ですがとてもかわいい子で安い宿代でその事を感じさせないおいしい料理が食べられますよ！建物が小さくてあまり多くの人は泊まれないので泊まるうと思った人はお早めにご予約を！ぜひぜひ来てください！」

そう俺が言つと、群衆の中で、

「へえ、そんな店があるのか」

「かわいい子ってどんな子だろー！」

「おいしい料理か・・・興味あるな」

といった声が聞こえてきた。

「・・・新しい門出の日に俺からのプレゼントだぜリタ」

さて、正直恥ずかしいし大分目立ってきたのでどこかへ行くとしよう。・・・いいかげん腹が痛いし。

「リタの宿はまあ無理だろうから・・・街の外でも行って日向ぼっこでもするか」

俺はそう言つて、群衆の中を駆け抜けけると、街の門への道を走って行った。

空には青い空が広がっていて、眩しい太陽が輝いていた。





## 第十一話 Bランクの実力、Fランクの底力（後書き）

はい、ということで第十一話、Bランクの実力、Fランクの底力でした。

いやー長かったー。

黒「ほんと、だらだらと書きつづつてたな」

いやー、色々書くこと考えてたんだけど書いてるうちに忘れちゃって・・・

黒「結局いつものように思いついたことを書いていたら長くなった」と

はい、そのとおりです・・・

黒「馬鹿か？」

ぐうつ・・・まあいいや。

黒「いいのかよ・・・」

いいんだよ！さて、これでリタについての話は大体おしまいです。あとはこの話の後日談になります。

黒「つか最後最終回っぽいけどいいのか？」

これ以外に終わり方が思いつかんかった・・・

黒「・・・そうか」

これまでは説明が多かったりしてだらだらした話でしたが、リタの話が終わったらいよいよ主人公の本格的な異世界での暮らしを書いて行きたいと思います。

黒「やつとか・・・ていうか土台づくりがなげーんだよ」

いやだつてさ、異世界の説明とかスタート地点を作るとかさ、そういう設定的な事ことテキストにやると後が辛いじゃん？

黒「ストーリーの方にもその意気で取り組まんかい！」

・・・がんばる。

黒「おう

では長くなったのでここで終わります。今回は多分後日談と第二章的なものの始まりな感じな話になると思います。

黒「・・・次回予告なんかして大丈夫なのか？」

まあ多分大丈夫だろ、予告詐欺になるかもしれんけど・・・

黒「駄目だろ！」

まあ頑張るさ。では読者のみなさん、ここまで見ていただいてありがとうございます！それでは！

黒「また今度ー！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2446ba/>

---

異世界に飛ばされたけど案外なんとかなるもんだ...

2012年1月10日22時17分発行